

# 津軽弘前藩の武芸(10)

資料紹介

太田尚充

## 寺山家所蔵・武芸関係古文書等(5)

### 目次

まえがき

内容の紹介

### 三、當田流棒(術) 写真(1)※

#### 1、「當田流棒目録 一」

卷子本

内題「當田流棒表之目録」

延宝八年(一六八〇) 九月十五日、當田半兵衛尉吉正より浅利伊兵衛あて。

#### 2、「當田流棒目録 二」

卷子本

内題「當田流棒裏之目録」

延宝八年(一六八〇) 九月十五日、當田半兵衛尉吉正より浅利伊兵衛あて。

#### 3、「當田流棒極意卷 三」

卷子本

内題「當田流棒極意之卷」

延宝八年（一六八〇）九月十五日、當田半兵衛尉吉正より浅利伊兵衛あて。

4、當田流棒目録 一

内容 當田流棒表之目録

正徳五年（一七一五）十一月三日、浅利伊兵衛尉均禄より、宛名は不詳。

5、當田流棒目録 一

内題「當田流棒表之目録」

正徳五年（一七一五）十一月三日、一戸参之助宗明より浅利万之助あて。

6、當田流棒目録 二

内題「當田流棒裏之目録」

正徳五年（一七一五）十一月三日、宛名の部分が切れているが一戸参之助宗明より浅利万之助あて。

7、當田流棒極意卷 三

内容 當田流棒極意之卷

正徳五年（一七一五）十一月三日、一戸参之助宗明より浅利万之助あて。

8、當田流棒目録 二

内容 當田流棒裏之目録

寛保元年（一七四一）七月吉日、左藤伊兵衛忠□より赤田□助あて。伝系は當田甚五兵衛——木村長八長盛——佐藤伊右

衛門忠清——乳井武助建明——左藤伊兵衛。

9、當田流棒目録

内容 當田流棒表之目録、同裏之目録、同極意之卷を一本にまとめたもの。

寛永六年（一七九四）、戸田与左衛門より戸田丈之助あて。伝系は當田半兵衛——浅利伊兵衛——斎藤弥五兵衛——戸田茂兵衛——戸田与左衛門。朱印・花押はない。また、戸田茂兵衛、戸田与左衛門の氏名記載に書き替えた形跡がある。

四、林崎新夢想流居合

後に記す。

## まえがき

寺山家が所蔵する古文書や記録、遺品等のうち、當田流太刀に関する古文書資料の紹介は当紀要の前号（第二十八号）で終ったので、今回は當田流棒（術）の伝書（卷子本）九点と、林崎新夢想流居合の伝書等十九点を紹介することにした。もっとも、前号の最後の資料「當田流太刀并居合・棒極位卷」（折本）の紹介の際、當田流棒（術）と林崎新夢想流居合についても當田流太刀とともにその一部を紹介してはいるが、今回は改めて取り組むことにした。

當田流棒（術）の卷子本九点のうち延宝八年（一六八〇）の日付のある三点は、津軽弘前藩當田流の始祖ともいべき當田半兵衛（前名甚五兵衛）吉正より浅利伊兵衛均禄に授与した原本である。他の六点は同系の継承者による伝書であり、右の原本に基いた写本である。原本と重複するがこれも併せて掲載することにした。

津軽弘前藩を代表する居合といへば林崎新夢想流居合を指すが、寺山家の所蔵するこの資料は四十五点という多数にのぼる。このうち十九点を今回紹介するが、うち三点は「居合指南許状」、他の十六点は浅利伊兵衛が「居合手鏡」を基にして書き写したと思われる伝書である。何れにしても、日付が「正徳五年（一七一五）八月五日」または享保元年（一七一六）八月五日」までの伝書を紹介することにした。

## 内容の紹介

## 凡例

- (1) 冊子本、卷子本等の表紙に題簽（箋）あるいは外題がある場合には、その題名は「」で示した。「」のない題名は、内容その他から推して仮につけた名称である。

- (2) 破損や虫害が甚しく、題名のつけ難い場合には「題名不詳」とした。
- (3) 体裁によって、卷子本、冊子本、折本、堅紙・折紙・切紙の四種に大別した。卷子本には、表紙や軸の失われているもの、あるいは始めから軸がなかったと思われる巻き紙のような様式まで含めた。
- (4) 古文書・記録等の紙質や縦・横の大きさ等は、特別なものと思われない限り省略した。
- (5) 特定の人物、字句、事件等については本文の後に「注」で示し、全体にかかわる事柄については「解説」の項を設けて説明を試みた。
- また、文中に「注」の必要な場合には（ ）内に示した。
- (6) 判読不明な文字は□で示した。
- (7) 色彩が必要と思われる資料の一部をカラー写真としたが、原本と必ずしも同色でないことをお断りしておく。
- (8) ※印のある写真は、本文の最後に一括して掲載した。

### 三、當田流棒

#### 1、「當田流棒目録」

卷子本

#### 内題「當田流棒表之目録」

- 一、打搦 写真(2) ※
- 一、袖下 写真(3) ※
- 一、こびん流シ 写真(4) ※
- 一、芝返シ 写真(5) ※
- 一、肘流シ 写真(6) ※



此一巻別而雖為秘事 写真(7)

依御執心不浅令相傳

畢聊龜相他言他見

有間敷者也

○鵜戸大権現

當田二十五代

當田清源

當田内記

當田權右衛門

當田權太夫

當田半兵衛尉

延寶八(二六八〇)  
庚申曆

吉正(朱印・花押) 写真(8) a ※

九月十五日

當田清源ヨリ六代

浅利伊兵衛尉殿



写真(7) 當田流棒目録一(表之目録)の奥書き。

2、「當田流棒目録 二」

卷子本

内題「當田流棒裏之目録」

一、ゑり卷 写真(9)※

一、小手流シ 写真(10)※

一、車返シ 写真(11)※

一、五月雨 写真(12)※

一、小手搦 写真(13)※

此一巻別而雖為秘事

依御執心不淺令相傳

畢聊龜相他見有

間鋪者也

○鵜戸大権現

當田二十五代

當田清源

當田内記

當田権右衛門

當田 權太夫

當田 半兵衛尉

延寶八(二六八〇)  
庚申曆

吉正(朱印・花押)

九月十五日

當田清源ヨリ六代

浅利伊兵衛尉殿

### 3、「當田流棒極意卷 三」

「當田流棒極意之卷」

写真(14)

卷子本

夫棒乃水源を尋に本来

刃なきものなり 故に心得

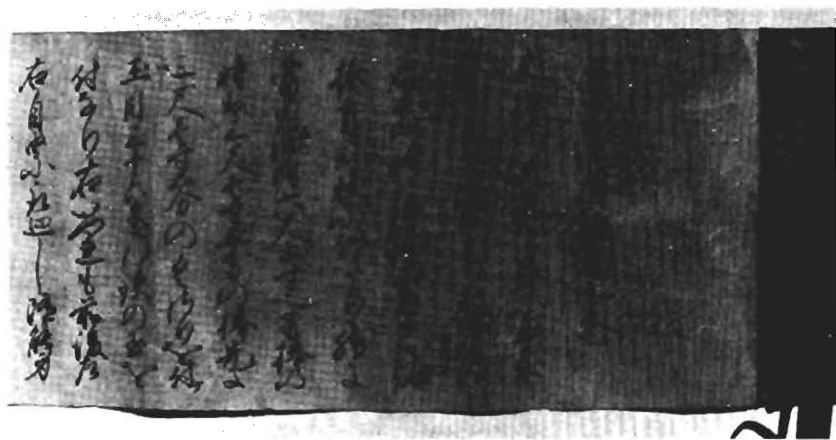
悪敷時ハ得利事なく 偏

振盲目杖に似たり 然に

當田流棒六尺三寸也 半棒の

写真(15)

時は三尺壹寸五分の棒先に



写真(14) 當田流棒極意卷三(極意之卷)前半の部分。

三尺一壺五分のくさりを付ケ(鎖)

玉目三十六匁之鉄の玉を

付なり 右いづれも前後左

右自由に取廻し 随能身

時ハ六尺三寸の間より敵近

よる事あたわす 然時にハ

其利はかりなき事なり

若敵六尺三寸の間方近く

よる時ハ尚以利有 第一敵の

てん(転)へん(巻)にしたがって得

利事秘中之秘也

一、実之棒 写真(16)※

一、忍之棒 写真(17)※

一、とんぼう(蜻蛉)かへし 写真(18)※

一、飛乱 写真(19)※

一、惣まくり 写真(20)※



写真(15) 當田流棒極意卷三(極意之卷)後半の部分。(写真14と重複している)



令授与畢自今以後望

之仁於有之者可御指南

者也仍許狀如件

○鶴戸大権現

當田二十五代

當田清源

當田内記

當田權右衛門

當田權太夫

當田半兵衛尉

延寶八二六八〇  
庚申曆

吉正(朱印・花押)

九月十五日

當田清源ヨリ六代

浅利伊兵衛尉殿

解説

1、當田流棒術の伝書は、目録一（表之巻）、目録二（裏之巻）、極意卷三（極意之巻）の三巻で、これが全部である。そして本資料の三巻は、津輕弘前藩の當田流棒術の始祖ともいべき當田半兵衛吉正より浅利伊兵衛均禄に授与した原本である。

2、目録一（表之巻）の技五本、目録二（裏之巻）の技五本は同流棒術の基本技で、資料の人物画はその「形」の一部を示すものと思われる。

3、技の名称の次に書かれている文言「此の一卷は別して秘事たりと雖も、御執心浅からざるに依り相傳せしめ畢（お）んぬ。聊かも麁相他見有るまじきもの也」は、目録一、目録二とも共通している。「當田流太刀」の「目録」の段階にある文言とはほぼ同じ形式である。

4、極意卷三（極意之巻）の冒頭の極意口上の文言に「偏えに盲目杖を振るに似たり」とあるが、これは「當田流太刀」の「極意之巻」にも引用している。

5、棒の長さは「六尺三寸」、「半棒」の場合は「三尺一寸五分」、それに「玉目三十六匁の鉄の玉」の付いた「くさり」の長さが「三尺一寸五分」であるので、合計「六尺三寸」となる。

「半棒之大事」「白刃取」の人物画は、くさり付きの半棒を持った構えである。

また「當田流棒」には鍵に対応する技三本がある。

6、「迷故三界城 悟故十方空 本来無東西 何所有南北」は禪の偈と思われる。

三界 仏教の世界観で、衆生が往来し、止住する三つの世界の意。三つの迷いの世界。

生死流転する迷いの世界を三段階に分けたもの。欲界・色界・無欲界。中村元（『佛教語大辞典』）

十方 十の方向の意。東・西・南・北・東南・西南・西北・東北・上下。（中村元『佛教語大辞典』）

7、結びの文言「右當田流棒の極意、別して秘事たりと雖も、稽古を遂げられ御執心深きに依り相傳の巻物授与せしめ畢んぬ。自今以後望みの仁これ有るに於ては御指南あるべきもの也。仍つて許状（くだん）の如し」は、「當田流太刀」のそれとほぼ同じ形式である。

8、當田半兵衛吉正が浅利伊兵衛均祿に授与した「延寶八年（一六八〇）九月十五日」は、「當田流太刀嫡傳之巻」及び「當田流太刀印可之巻（返起請文之事）」をも授与した日でもある。すなわち浅利伊兵衛は、「當田流太刀」の印可とともに、同じ日に、同流棒の「許状」も授与されていたことになる。

9、當田半兵衛吉正の朱印は現在も保存され貴重である。印文は「吉正」。

写真(8)P※

#### 4、當田流棒目録 一

#### 卷子本

本資料は卷子本の形式をとっているが、芯となる軸がなく、巻き紙の様式である。

人物画をもって形を示しているが、その図は1と

同じであるので省略した。

奥書きのあて名の部分が欠損している。

#### 當田流棒表之目録

一、打搦

一、袖下

一、こびん流シ



一、芝返し

一、肘流シ

此一巻別而雖為

秘笈依御執心不

浅令相傳早聊庵

相他言他見有間

敷者也

○鶴戸大権現

當田二十五代

當田清源

写真26

當田内記

當田權右衛門

當田權太夫

當田半兵衛

浅利伊兵衛尉



写真26 資料4の奥書きの伝系。あて名の部分が切れている。

延寶八<sup>(二七二五)</sup>  
未曆「源均祿(朱印・花押)」

十一月三日

# 5、當田流棒目錄 一

卷子本

先の部分が欠けている。様式は4と同じ。人物画をもつて形を示しているが、その図は1と同じであるので省略した。

## 當田流棒表之目錄

一、打搦

一、袖下

一、こびん流シ

一、芝返シ

一、肘流シ

此一巻別而雖為秘事依  
御執心不浅令相傳畢聊  
麁相他見有間敷者也

鵜戸大権現

當田二十五代

當田清源 写真27

當田内記

當田權右衛門尉

當田權太夫

當田半兵衛尉

浅利伊兵衛尉

一戸参之助

正徳五  
乙未  
曆

十一月三日

宗明(朱印・花押)

當田清源ヨリ八代

浅利万之助殿

# 6、當田流棒目録 二

卷子本

先の部分が欠損している。様式は4と同じ。人物画をもって形を示しているが、その図は2と同じであるので省略した。

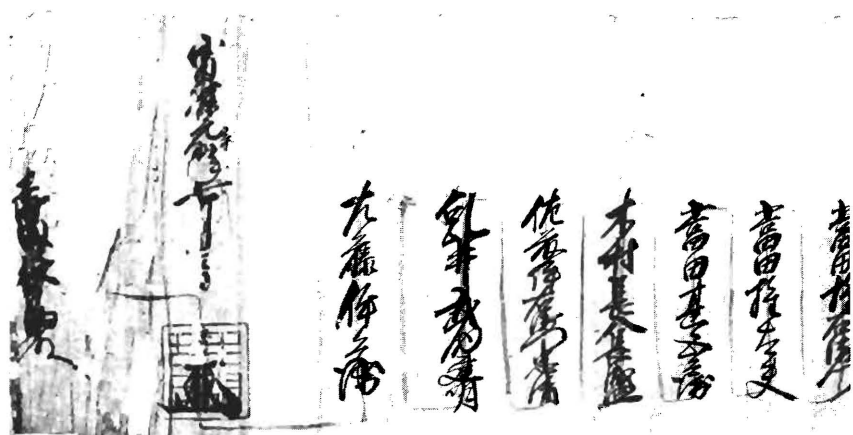


写真27 資料5の奥書きの伝系。資料4と同じ日付であるが、一戸参之助より「當田清源ヨリ八代」浅利万之助あてになっている。

當田流棒裏之 〔目錄〕  
☐ ☐

一、ゑり卷

一、小手流シ

一、車返シ

一、五月雨

一、小手搦

此一卷別而雖為秘事依

御執心不淺令相傳畢聊

龜相他見有間敷者也

鵜戸大権現

當田二十五代

當田 清源

當田 内記

當田 権右衛門尉

當田 権太夫

當田 半兵衛尉

浅利 伊兵衛尉

一戸 参之助

正徳五<sup>二七五</sup>  
乙未<sup>五</sup>曆

十一月三日

宗明(朱印・花押)

當田清源ヨリ八代

浅利万之助殿

# 7、當田流棒極意卷 三

先の部分が欠損しているのみでなく、全体的に虫害が大きい。技については人物画をもつて形を示しているがその図は3と同じであるので省略した。様式は4と同じ。

## 當田流棒極意之卷

夫棒乃水源を尋に本来

刃のなき物なり 故に心得

悪敷時は得利事なく偏

振盲目杖に依たり 然に

當田流棒六尺三寸也 半棒の  
時は三尺一寸五分の棒さきに  
三尺壹寸五分のくさを付け 玉

目三拾六匁の鉄の玉を付る也

右いづれも前後左右自由に

取廻し能隨身時は六尺三寸

乃間より敵近よる事あた

わす 然時には其利はかり

なき事なり 若敵六尺三寸

の間より近くよる時は猶以

利有 第一敵乃てん(転)へん(意)

にしたかつて得利事

秘中之秘也

一、実之棒

一、忍之棒

一、とんほうかへし

一、飛乱

一、惣まくり

半棒之大事

一、白刃取

鍵留之大事

一、打留

一、捨留

一、大車

一、極意口上之大事

一、外物之事

一、無量口傳之事

口傳

口傳

口傳

迷故三界城 悟故十方空

本来無東西 何所有南北

右富田流棒之極意別而雖為

秘事被遂稽古依御執心深  
相傳之卷物令授与畢自今  
以後望之仁於有之者可御  
指南者也 仍許狀如伴  
鵜戸大権現

當田二十五代

當田 清源

當田 内記

當田 権右衛門尉

當田 権太夫

當田 半兵衛尉

浅利 伊兵衛尉

一戸 参之助

正徳(二七一五)  
五乙未曆

十一月三日

宗明(朱印・花押)

當田清源ヨリ八代

浅利万之助殿



1、本資料の伝書の日付「正徳五年（一七一五）十一月三日」について。

弘前市立弘前図書館は次の「當田流棒」の伝書（卷子本）三巻を所蔵している。（当紀要第二十四号一一四頁

——一九頁に紹介済み）

(1) GK—789—72 『當田流棒表之目録』

正徳五<sup>乙</sup> 未曆十一月三日

浅利伊兵衛均禄より宛名なし。

(2) GK—789—71 『當田流棒裏之目録』

正徳五<sup>乙</sup> 未曆十一月三日

浅利伊兵衛均禄より宛名なし。

(3) GK—789—70 『當田流棒極意之巻』

正徳五<sup>乙</sup> 未曆十一月三日

浅利伊兵衛均禄より宛名なし。

右のように、何れも宛名のない浅利伊兵衛均禄からの伝書で、これは本資料4と同様である。また、本資

料の5・6・7の三巻は、同じ「正徳五<sup>乙</sup> 未曆十一月三日」の日付であるが、一戸参之助宗明より浅利万之助あ

ての伝書である。しかも浅利万之助の「肩書き」は「當田清源ヨリ八代」となっている。このことから、本資

料4は、浅利伊兵衛均禄より「當田清源ヨリ七代」一戸参之助宗明への伝書と推定される。弘前図書館所蔵の

三巻も、「當田清源ヨリ七代」への伝書の写しではないかと思われる。

2、浅利伊兵衛均禄より「當田清源ヨリ七代」一戸参之介宗明への授与が「正徳五年（一七一五）十一月三日」

とすれば、同日、直ちに「當田清源ヨリ八代」浅利万之助へ一戸参之助が授与したことになる。この浅利万之

助は、浅利伊兵衛均禄の嫡男万之助均実（均費とも）であるので、一戸参之助は自分は受けるべきでないと考えての処置であつたと思われる。

3、本資料 4・5・6・7の各巻の技の形は、人物画によって図示している。最後にまとめて示した写真とほぼ同様であるのでこれを省略した。

## 8、當田流棒目録 二

本資料も先の部分が欠損している。人物画をもつて形を示しているが、判読できる部分から記した。様式は4と同じ。

車返

五月雨

小手搦

右此一巻雖為秘事之間聊

麁相他見有間敷者也

鵜戸大権現ヨリ當田二十五代

當田清源

當田 内記

當田 権右衛門

當田 権太夫

當田 甚五兵衛

木村長八 長盛 写真四

佐藤伊右衛門忠清

乳井武助 建明

佐藤 伊兵衛

寛保元 (一七四一) 辛酉 曆七月吉日 忠口(朱印・花押)

赤田□助殿

# 9、當田流棒目録

卷子本

本資料も先の部分が欠損しているので外題は不明である。内容は「表之目録」「裏之目録」「極意之巻」を一本にまとめたものである。人物画(省略)もあり、形式の上では伝書になっているが、正式のものか疑問もある。

## 一、袖下



写真08 資料8の奥書きの最後の部分。この伝系は當田甚五兵衛から木村長八長盛と続いている。

一、こひん流シ

一、芝返シ

一、肘<sup>ヒツ</sup>流シ

當田清源ヨリ拾代

戸田 丈之助殿

當田流棒裏之目錄

一、エリ卷

一、小手流シ

一、車返シ

一、五月雨

一、小手搦

此一卷別而雖為

秘事依御執心不

浅令相傳畢聊麁

相他見有間敷者

也

鵜戸大権現

當田式十五代

當田清源

當田内記

當田權右衛門

當田權太夫

當田半兵衛尉

淺利伊兵衛尉

當田流棒極意之卷

夫棒の水源を尋に本来刃

なきものなり 故に心得

悪敷時は得利事なく 偏

振盲目杖に似たり 然に

当田流棒六尺三寸也 半

棒の時は三尺壹寸五分の

棒先に三尺壹寸五分のく

さりを付ケ玉目三拾六匁  
 の鉄の玉を付る也 右い  
 つれも前後左右自由に取  
 廻 能隨身時は六尺三寸  
 の間より敵近よる事あた  
 わす 然時は其利はかり  
 なき事也 若敵六尺三寸  
 の間よりちかく寄時は猶  
 以利有 第一敵のてんへ(秘変)  
 んに随て得利事 秘中の  
 秘也

一、実之棒

一、忍之棒

一、蜻蜓返し

一、飛乱

一、惣まくり

半棒之大事

一、白刃取

鍵留大事

一、打留

一、捨留

一、大車

一、極意口上之事

口傳

一、外物之事

口傳

一、無量口傳事

口傳

迷故三界城

悟故十方空

本来無東西

何所有南北

右當田流棒之極意別而雖

為秘事被遂藝古依御執心

深相傳之卷物令授與訖自

今以後望之仁於有之者可  
有御指南者也 仍許狀如

件

鶴戸大権現

當田式拾五代

當田清源

写真(29)

當田内記

當田權右衛門

當田權太夫

當田半兵衛尉

浅利伊兵衛尉

斎藤弥五衛門尉

戸田茂兵衛

戸田与左衛門

寛政八<sup>(二七九四)</sup>  
甲寅曆年

當田清源ヨリ拾代

戸田丈之助殿

寛政八<sup>六</sup>年  
當田清源拾代  
戸田丈之助殿  
大相名  
當田清源  
當田内記  
當田權右衛門  
當田權太夫  
當田半兵衛尉  
浅利伊兵衛尉  
斎藤弥五衛門尉

写真(29) 資料9の奥書きの伝系。戸田茂兵衛と戸田与左衛門の氏名は書き直されている。



## 解説

1、資料9の奥書きの伝系は、戸田茂兵衛と戸田与左衛門の氏名の記載を書き直している。朱印も花押もないところから、この資料は「控」ではないかと思われる。

2、當田流棒の継承者は、奥書きの伝系をみると次のように三つの系統に分派している。

- (1) 當田<sup>(嘉五兵衛)</sup>半兵衛吉正——淺利伊兵衛均祿——一戸<sup>(三)</sup>参之介宗明——淺利万之助均実(均費とも)
- (2) 當田<sup>(半兵衛)</sup>甚五兵衛吉正——木村長八長盛——佐藤伊右衛門忠清——乳井武助建明——左藤伊兵衛
- (3) 當田<sup>(嘉五兵衛)</sup>半兵衛吉正——淺利伊兵衛——齋藤弥五兵衛——戸田茂兵衛——戸田与左衛門

當田甚五兵衛吉正は、半兵衛と改名する前に木村長八長盛に當田流棒の伝書を授与していたことになる。その期日は不詳であるが、淺利伊兵衛への授与よりも早い時期と考えられる。このことは、津輕弘前藩の當田流棒は、木村長八系統と淺利伊兵衛系統と二大系統の存在を物語っている。

また、淺利伊兵衛系統は、更に万之助均実の直系と齋藤弥五兵衛の傍系の二つの系統に分かれている。

## 四、林崎新夢想流居合

## 1、「指南許状」

切紙

正徳五<sup>乙未</sup>歲(一七一五)十一月十六日、淺

利伊兵衛均祿より今弥五郎あて。

## 2、「指南許状」

切紙

延享元<sup>甲子</sup>年（一七四四）四月十五日、浅利  
万之助均費より佐和市之丞あて。

## 3、「指南許状」

切紙

延享四「卯年（一七四七）四月三日、浅利万  
之助均費より浅利金五郎あて。

## 4、「居合向之次第 一」

写真複製

卷子本

## 内題「向次第」

常井喜兵衛尉直則より浅利伊兵衛あて。日  
付、朱印・花押はない。

伝系は、林崎甚助重信——田宮平兵衛照常  
——長野無楽斎謹露——一宮左太夫昭信——  
——谷小左衛門季正——常井喜兵衛——浅  
利伊兵衛。

## 5、「居合右身之次第 二」

卷子本

内題「右身之次第」伝系等4と同じ。

## 6、「居合左身之次第 三」

卷子本

内題「左身之次第」伝系等4と同じ。

7、「居合外物次第」(このもの) 四

卷子本

内題「外物次第」伝系等4と同じ。

8、「居合外物次第」五

卷子本

内題「外物次第」「高上極意之巻」。伝系は

4と同じであるが、浅利伊兵衛に続いて浅利万之助均費——浅利金五郎あてとなっている。ただし、日付、朱印、花押はない。

9、「居合秘歌之巻」六

卷子本

内題「秘歌之大事」伝系等4と同じ。

10、極意相傳之巻

卷子本

内容「極意相傳之巻」伝系等4と同じ。

11、「均禄夢想居合 極意之巻」

卷子本

内題「均禄夢想居合極意之巻」

伝系を書かず、「夢想之年号、延宝八年甲曆（一六八〇）九月十一日、浅利伊兵衛均禄（朱印・花押）」と記している。また、あて名はなく「弟子中募執行、尤人柄可然人躰江可傳授者也」

との添え書きがある。

12、居合許印可太刀心持之事

卷子本

内題「居合許印可太刀心持之事」

伝系、日付、あて名の記載はない。「居合許之書物」として「一、向次第之卷。二、右身卷。三、左身卷。四、外物許卷。五、歌之卷。六、手鍵卷。外 許状(ばかり)是計也」を挙げている。

13、高上極意夢想心鏡 明鑑之卷

卷子本

内題「高上極意夢想心鏡 明鑑之卷」

承応三年（一六五四）十二月、常井喜兵衛の記したものとなっているが、その写本である。次のような添え書きがある。

「右者常井喜兵衛夢想之卷 喜兵衛自筆ニテ書記被置候ヲ七戸権右衛門へ相傳被申候 夫  
 元禄十五壬午年（一七二〇）閏八月十六日

権右衛門妻子衆ら松山善之丞へ相傳 権右衛門ハ右同年二月十四日死亡 善之丞及末端棟

方嘉兵衛へ相傳 夫も浅利伊兵衛居合ノ印可  
不殘申請ノ書物計ニテ傳授事一圓無之」

14、居合印可十二用之次第

卷子本

内題「十二用次第」

享保元年（一七一六）八月五日、棟方嘉兵  
衛より浅利伊兵衛あて。

15、居合印可五ヶ之次第

卷子本

内題「五ヶ次第」

棟方嘉兵衛より浅利伊兵衛あて。日付は「八  
月五日」とのみ記している。

16、居合印可切刃之次第

卷子本

内題「切刃次第」破損が大きい。

棟方嘉兵衛より浅利伊兵衛あて。日付は「八  
月五日」とのみ記している。

17、居合印可口之次第

卷子本

内題「合口次第」

棟方嘉兵衛より浅利伊兵衛あて。日付は「八  
月五日」とのみ記している。

## 18、居合印可高上極位之巻

巻子本

内容「高上極位之巻」被損が大きい。

正徳五年（一七一五）八月五日、棟方嘉兵衛より浅利伊兵衛あて。

## 19、居合許印可心持之事

内題「居合許印可心持之事」

正徳五年（一七一五）八月五日、浅利伊兵衛が書いたもの、あて名はない。「居合手鏡」と称するものである。

あながき

## 四、林崎新夢想流居合

1、指南許状 写真⑧

切紙

縦約26・3cm、横約46・3cm

抑居合雖為劍術之儀

且者数年被遂稽古且深

志依不浅相傳之目錄令



写真⑧ 「指南許状」正徳5乙未歳（1715）11月16日、浅利伊兵衛均禄より今弥五郎あて。印判の部分を書で消した跡がある。縦26.3cm横46.3cm。

授与畢此上者望之仁於有

之者御指南尤候仍許狀

如件

正徳五<sup>(二七五)</sup>  
乙未歲

浅利伊兵衛尉

十一月十六日

源均祿(朱印・花押)

今 弥五郎殿

参

## 2、指南許狀 写真 60

抑居合雖為劍術之儀

且者數年被遂稽古且深

志依不浅相傳之目録令

授与早此上者望之仁於

有之者御指南尤候仍而

許狀如件

浅利万之助



写真60 「指南許狀」延享元<sup>甲</sup>子年(1744)4月15日、浅利万之助均費より佐和市之丞あて。

延享元<sup>(一七四四)</sup>甲子曆年四月十五日

源均費(朱印・花押)

佐和市之丞殿

参

3、指南許状 写真(33)

抑居合雖為劍術之儀

且者數年被遂程古旦

深志依不淺相傳之目錄

令授与早此上者望之仁

於有之者御指南尤候仍

許状如件

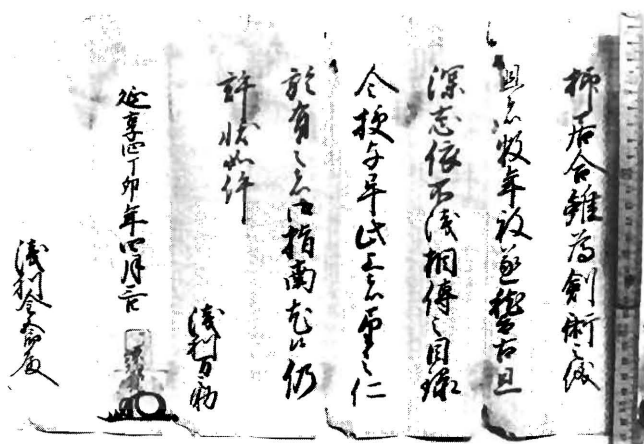
浅利万之助

延享四<sup>(一七四七)</sup>丁卯年四月三日

源均費(朱印・花押)

浅利金五郎殿

参



写真(33) 「指南許状」延享4<sup>T</sup>卯年(1747)4月3日、浅利万之助均費より浅利金五郎あて。



## 解説

(1) 当時の津軽弘前藩の居合といえは「林崎新夢想流居合」が代表であるが、この居合の指南許状が三通残っている。

「抑<sup>おしよ</sup>居合は、剣術の儀たりといえども、かつは数年稽古を遂げられ、かつは深き志浅からずに依り、相伝の目録授与せしめおわんぬ。此の上は望みの仁（これ）有るに於いては御指南もつとも候。仍って許状<sup>くだん</sup>件の如し。

正徳五<sup>乙未</sup>歳（一七一五）

十一月十六日

浅利伊兵衛尉

源均<sup>（たよし）</sup>禄（朱印・花押）

今 弥五郎殿

参<sup>（まゐる）</sup>」

以下

延享元<sup>甲子</sup>年（一七四四）四月十五日、浅利万之助均<sup>（たもち）</sup>費より佐和市之丞あてと、延享四<sup>丁卯</sup>年（一七四七）四月三日、同じく浅利万之助均費より浅利金五郎あての二通である。何れも文面の大意は変っていない。

#### 4、「居合向之次第」

卷子本

形は人物画をもつて示している。

林崎新夢想流居合

極位秘術唯授一人

目録

向次第

押立 写真(34)※

押抜 写真(35)※

防身 写真(36)※

除身 写真(37)※

幕越 写真(38)※

胸刀 写真(39)※

頭上 写真(40)※

○天真正

林明神

林崎甚助 重信

田宮平兵衛照常

長野無楽斎謹露

写真(41)



写真(41) 「居合向次第第一」の伝系の部分。常井喜兵衛尉直則より浅利伊兵衛尉あてとなっているが、朱印・花押はなく、日付の記載もない。

浅利伊兵衛尉殿

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛尉直則

## 5、「居合右身之次第 二」

卷子本

形は人物画をもって示している

林崎新夢想流居合

極位秘術唯授一人

目録

右身次第

突入 写真(40)※

抜詰 写真(43)※

手取扱 写真(44)※

柄取 写真(45)※

臥足 写真(46)※

○天真正

林明神

林崎甚助 重信

田宮平兵衛照常

長野無樂斎謹露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛尉直則

浅利伊兵衛尉殿

## 6、「居合左身之次第 二」

卷子本

形は人物画をもって示している。

林崎新夢想流居合

極位秘術唯授一人

目録

## 左身次第

開拔 写真(47)※左足 写真(48)※鞭結 写真(49)※肢去拔 写真(50)※向足 写真(51)※

○天真正

林明神

林崎甚助 重信

田宮平兵衛照常

長野無楽斎権露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛尉直則

浅利伊兵衛尉殿

7、「居合外物次第」<sup>(このもの)</sup>

卷子本

形は人物画をもつて示している。

林崎新夢想流居合

極位秘術唯授一人

目録

## 外物次第

取違 写真 62 葉

寄足 写真 63 葉

寄身 写真 64 葉

懸蜻蜒 写真 65 葉

逆手 写真 66 葉

胸刀 写真 67 葉

逆頭上 写真 68 葉

○天真正

林明神

林崎甚助 重信

浅利伊兵衛尉殿

田宮平兵衛照常

長野無楽斎權露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛尉直則

# 8、「居合外物次第 五」

卷子本

形は人物画をもって示している。

林崎新夢想流居合

極位秘術唯授一人

目録

外物次第

頂上 写真 69 葉

切先廻 写真 69 葉

二方詰 写真 69 葉

高上極位之卷 写真(62)

抑此兵術者自己默然而

無進莫退左右又如斯唯

是逢源到一劍刃上一走二水

陵上<sup>(1)</sup>於二生死岸頭一得二大自在

向二六道四生<sup>(2)</sup>一空古人云世間空

空無佛性空々真按レ之右之

兵術是也

千金莫傳可秘々々

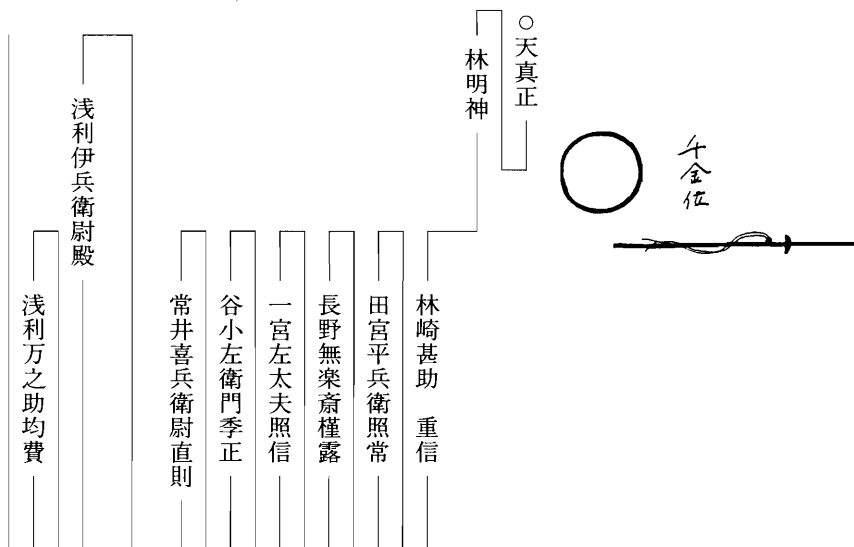
唯授一人

萬事拔



写真(62) 居合外物次第五「高上極位之卷」の部分。





## 浅利金五郎殿

注

(1)

「到<sup>二</sup>劔<sup>一</sup>刃<sup>二</sup>上<sup>一</sup>」走<sup>二</sup>氷<sup>一</sup>陵<sup>二</sup>上<sup>一</sup>」(劔<sup>けん</sup>刃<sup>じん</sup>上<sup>じやう</sup>に到<sup>いた</sup>り、氷<sup>ひやう</sup>陵<sup>りやう</sup>上<sup>じやう</sup>に走<sup>はし</sup>る)の典故について。

心形刀流の松浦静山が書き著した武芸書『劔<sup>けん</sup>放<sup>ほう</sup>』(文化十二年△一八一五△)の巻一に、刀法『劔<sup>けん</sup>忍<sup>にん</sup>誠<sup>じやう</sup>』について説く箇所があり、その「再記」の項に次の一節がある。

「前に云へる劔<sup>けん</sup>忍<sup>にん</sup>誠<sup>じやう</sup>の太刀は、其の実は劔<sup>けん</sup>刃<sup>じん</sup>上<sup>じやう</sup>なる由は審かに弁<sup>わ</sup>んぜり、然れどもただ臆<sup>おそ</sup>度にして正説なし。近頃聞<sup>きこ</sup>く。此事は禪<sup>ぜん</sup>家に其の語あり。宋の圖語禪師の碧巖集の垂<sup>すい</sup>示<sup>し</sup>に曰<sup>い</sup>く。垂示とは、説法の如く、人に言聞がす事なり。是非交結の処、聖も亦知事能はず。逆順縦横の時、仏も亦弁<sup>わ</sup>ん事能はず。絶世超倫之士と為て逸群大士之能を顯<sup>あらわ</sup>はす。大士とは、菩薩と云ふに同じ。氷<sup>ひやう</sup>陵<sup>りやう</sup>上<sup>じやう</sup>に向<sup>むか</sup>つて行<sup>い</sup>き、劔<sup>けん</sup>刃<sup>じん</sup>上<sup>じやう</sup>に走<sup>はし</sup>ると、これ正しく劔<sup>けん</sup>刃<sup>じん</sup>上の文字の出づる所なり。以下略。」(今村嘉雄編『日本武道全集第一巻』所収。『劔<sup>けん</sup>放<sup>ほう</sup>』二七八——二八三頁、一九六六、人物往来社)

本資料の「到<sup>二</sup>劔<sup>一</sup>刃<sup>二</sup>上<sup>一</sup>走<sup>二</sup>氷<sup>一</sup>陵<sup>二</sup>上<sup>一</sup>」は、右の『劔<sup>けん</sup>放<sup>ほう</sup>』成立以前の伝書の一節であるので右からの引用とは考えられない。

また、「林崎流居合指南秘伝書」「田宮流和劔秘之巻」「田宮流居合目録」等(『日本武道全集第七巻』所収、二五三——三十八頁、既出)にも出てこないところから、同流の伝書に、もともと使われていたかどうかとも不詳である。

『劔<sup>けん</sup>放<sup>ほう</sup>』のいう中国宋代の圖悟克勤禪師の『碧巖集』(『碧巖録』とも。詳しくは『仏果圖悟禪師碧巖録』または『仏果碧巖被問擊節』という)の「垂<sup>すい</sup>示<sup>し</sup>」からの引用というのは、『碧巖録』第四十六則「鏡<sup>きやう</sup>清<sup>しやう</sup>雨<sup>う</sup>滴<sup>てき</sup>聲<sup>しやう</sup>」の「如<sup>ごと</sup>二氷<sup>ひやう</sup>凌<sup>りやう</sup>上<sup>じやう</sup>行<sup>ぎやう</sup>、劔<sup>けん</sup>刃<sup>じん</sup>上<sup>じやう</sup>走<sup>はし</sup>」(氷<sup>ひやう</sup>凌<sup>りやう</sup>上<sup>じやう</sup>に行<sup>い</sup>き、劔<sup>けん</sup>刃<sup>じん</sup>上<sup>じやう</sup>に走<sup>はし</sup>るが如し)からである。また、同じく第一百則の「巴<sup>は</sup>陵<sup>りやう</sup>吹<sup>ふ</sup>毛<sup>もう</sup>劔<sup>けん</sup>の「評<sup>ひやう</sup>唱<sup>じやう</sup>」に「氷<sup>ひやう</sup>陵<sup>りやう</sup>上<sup>じやう</sup>行<sup>ぎやう</sup>」の語はないが「劔<sup>けん</sup>刃<sup>じん</sup>上<sup>じやう</sup>吹<sup>ふ</sup>毛<sup>もう</sup>試<sup>し</sup>之<sup>し</sup>、其毛自<sup>みづか</sup>断<sup>た</sup>つ」(劔<sup>けん</sup>刃<sup>じん</sup>上<sup>じやう</sup>に毛<sup>もう</sup>を吹<sup>ふ</sup>いて之<sup>し</sup>を試<sup>し</sup>むるに、其の毛<sup>もう</sup>自<sup>みづか</sup>ら断<sup>た</sup>つ)と「劔<sup>けん</sup>刃<sup>じん</sup>上<sup>じやう</sup>」の語は見受けられる。(朝比奈宗源訳註『碧巖録・中』一三三——一三三頁、『碧巖録・下』二四四——二四七頁、岩波文庫)

『碧巖録』は、「古来△宗門第一の書△とよばれて仏道修行のテキストに用いられ、中国・日本を通じてもつとも流行した禪の公案集」(『佛教大事典』参考。一九八八、小学館)であったので、武芸修行者もまたこれに接する機会が少なからずあつたと考えられる。

しかし、無門慧開禪師によつて『碧巖録』の約百年後に成立(中国・南宋紹定元年△一二二八△)したといわれる『無門関』の第三十二「外道問<sup>ぐうだもん</sup>仏<sup>ぶつ</sup>」の「頌<sup>じゆ</sup>」においても「劔<sup>けん</sup>刃<sup>じん</sup>上<sup>じやう</sup>に行<sup>い</sup>き、氷<sup>ひやう</sup>陵<sup>りやう</sup>上<sup>じやう</sup>に走<sup>はし</sup>る」の語は見られる。(『禪の語録18』『無門関』平田高士訳注、一二〇——一二三頁、一九六九、筑摩書房)

右を整理すれば

碧巖録第四十六則

如「氷凌上行 劔刃上走」

無門関第三十二

劔刃上行 氷凌上走

本資料

到「劔刃上」走「氷陵上」

となり、本資料では「行」が「到」に、「凌」が「陵」に変えられ、語の並べ方も『碧巖録』の「氷凌上」が先にあつたのが、後者では後におかれている。どちらかの引用かは軽々に断じ難いが、語の並べ方の点や『無門関』の方が広く流布されていた点から、『無門関』からの引用の可能性が強いと考えられる。

また、飯篠長威斎家直を流祖とする天真正伝香取神刀流（新当流）の第七代・飯篠盛繁の『新当流兵法書』（寛永の頃）一六二四—一六四三（成立）の「玉簾集」の一節に「得自由則劔身上行、氷陵上走。是微妙不可得之儀」（自由を得るは則ち劔身上を歩き、氷陵上に走る。是れ微妙得べからざるの儀なり）。（今村嘉雄編『日本武道全集第二巻』所収。二五六頁。既出）とある。本資料のみでなく、他流の武芸伝書にも「劔刃上行 氷凌上走」の禅語が使われていたことを物語っているが、この「新当流兵法書」からの引用とは考え難い。

(2)

「到「劔刃上」走「氷陵上」の意味について。

意味については、『無門関』の「頌」を語句通り解釈すれば「（仏と外道の問答は）鋭い劔の刃上を行くごとく、またいつ割れるかわからない氷の上を走るようなものである。ちよつととまどうと喪身失命する」（『無門関』平田高士訳注。一二三頁。既出）ということになる。

しかし、禅者安谷白雲はその著『禅の心髄・無門関』（二二二頁、一九六五、春秋社）で「劔刃上に行き、氷陵上に走るは、二つとも譬えだ。ぐずぐずしていると足が切れるし、すべってころぶと、言葉の表面では、外道の機敏な所を歌っているが、実は分別心が少しでも動いたら、すぐに足がぶち切れるということだ。ハテナと頭をひねったら、一ぺんに落第だということだ」と述べている。

本資料に即して意識すれば「わが身の無事を少しも考えず、自ら死生の境に身を投げ入れて自他の劔に活殺をゆだねる」ということになろう。この心底を禅の語句をかりて表現したものと思われる。

(3)

「於「生死岸頭」得「大自在」向「六道四生」空」の典故について。

前記『無門関』第一「趙州狗子」の次の一節からの引用ではないかと思われる。

「前略——逢仏殺仏、逢祖殺祖、於生死岸頭、得大自在、向六道四生遊戯三昧。——後略」（前略）——仏に適うては仏を殺

(4)

し、祖に逢うては祖を殺し、生死岸頭しじやうがんとうに於て自在だいじざいを得、六道四生ろくどうしじやうに向つて、遊戯ゆげ三昧さんまいならん。——後略（禪の語録18「無門関」平田高士訳注、一四——二〇頁。既出）

右の意味について

「六道四生」について、中村元著『佛教語大辞典』では「六道は衆生が業に従つておもむき住む六種の世界。地獄、餓飢鬼、畜生、阿修羅、人間、天上を云う。四生は生類をその出生の形態上から四つに分類したもの。胎生、卵生、湿生、化生をいう。」と述べている。

注(3)の平田高士は、右の「六道四生」について「輪廻の世界をいう。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上が六道で、胎生・卵生・湿生・化生をいう。迷いの世界のすべて」と述べている。

右は両者とも「六道四生」の語句の解釈として述べているが平田高士は先に挙げた「趙州狗子」の一節の意味については次のように訳している。

「前略——（無の一字の別体験こそは）釈迦に逢うては釈迦を殺し（仏縛を破り）、達磨に逢うては達磨を斬つて捨てる（祖師縛を破る）のであり、そのとき、君たちは生死無常の現世に在りながら、無生死の自在を手に入れ、六道や四生の世界に在りながら、すでに平和と真実の世界に遊んでいる。」

また、右と同じ箇所について安谷白雲は、『禪の心髄・無門関』（既出、三三—三三頁）で次のように訳（提唱）している。

「前略——すなわち仏といわれる釈迦が出来ても、祖師と呼ばれる達磨が出来ても、一刀の下に斬り殺してしまふ、とは何か。それは仏の教えを聞いても、その言葉に執しやくわれることがなくなり、祖師の垂示を聞いても、その言句の末に拘泥することがなくなるといふことを強く表現したのだ。

したがって貧苦に処しても憂うことなく、富貴に処しても驕ることなく、堂々と正しく、立派に人生を生き抜くことができるとともに、いつ死に直面しても、悠々として、これに應じて適当な態度をとることができる。そして、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上等の六道の世界に、あるいは胎生、あるいは卵生、あるいは湿生、あるいは化生と、何になっても、決して順逆の境に悩まされることがなくなり、常にそれらの生活を、あたかも兒童が嬉々として余念なく戯れていると同じように、愉快に満喫することができるようになる。」と、この方がわかり易い。

本資料に即して意識すれば、「生死を分けるぎりぎりの場でなおかつ悠々と自由な心境にあるということとは、現世のいかなる廻りあわせにあつても無心でいることができる」ということにならう。

(5)

「無佛性」①仏となるべき可能性のないこと。②仏性はわれわれの心であり、あらゆるものはみなこれの顕現であるから、仏性

のほかに何もなく、特に仏性ということも不要である、という意。(中村元『佛教語大辞典』)

- (6) 「按」(按ずる) ①(押さえるの意) ②手を掛ける。なでる。多く、刀の柄に掛けることをいう。(中田祝夫編監修『古語大辞典』小学館)

『碧巖録』や『無門関』に「牛頭ゴウを按じて草を喫せしむ」とあるが、この「按」は押さえるの意としている。

## 解説

### 1、高上極位之巻の「高上極位」について。

関口万平『関口流柔極意書』(著述の時期不詳。関口万平は享和元年△一八〇二▽七月五日病死、六十歳)(渡辺一郎編『武道の名著』所収。一九七九、東京コピ―出版社)の「印歌」三十三首の中に「高上ハ 極意ノ上ノ位イナリ 其身心ノ 威光第一」という歌がある。

右の歌から推して「高上極位」とは、極意のもうひとつ上の段階で、その流儀の心技にわたる真骨頂を示す位と考えられる。

「高上」の語は、諸橋轍次『大漢和辞典』に「高い位」と出ているが、本資料の「高上」の理解の資にならない。

なお、柳生石舟斎宗厳の『新陰流兵法目録事』(慶長六年△一六〇一▽二月)(今村嘉雄編『日本武道大系第一巻』所収。三九頁、一九八二、同朋舎出版)に「高上」「極意」が「無二劔」「活人刀」「神妙劔」等とともに見られるが、これは刀法の名称であるので、本資料の「高上」の理解の資にならない。

### 2、高上極位之巻

「そもそも此の兵術は、自己黙然として進むことなく退くことなく、左右また斯くの如し。唯是れ源に逢い、

劔<sup>(けん)</sup>刃<sup>(じん)</sup>上<sup>(じやう)</sup>に到<sup>(いた)</sup>り、氷<sup>(ひやうり)</sup>陵<sup>(りやう)</sup>上<sup>(じやう)</sup>に走<sup>(しやう)</sup>る。生<sup>(しやう)</sup>死<sup>(じ)</sup>岸<sup>(きん)</sup>頭<sup>(とう)</sup>に於<sup>(お)</sup>いて大自在<sup>(だいじざい)</sup>を得<sup>(え)</sup>、六<sup>(ろく)</sup>道<sup>(どう)</sup>四<sup>(し)</sup>生<sup>(じやう)</sup>にむかいて空<sup>(くう)</sup>なり。古人<sup>(こじん)</sup>云<sup>(い)</sup>わく、世間の空は空にして無佛性<sup>(むぶつじやう)</sup>、空空<sup>(くくう)</sup>の真<sup>(ま)</sup>は之<sup>(これ)</sup>を接<sup>(せつ)</sup>するにありと。右<sup>(みぎ)</sup>の兵衛<sup>(へいゑ)</sup>是<sup>(こゝ)</sup>れ也<sup>(なり)</sup>」

3、高上極位の巻は、林崎新夢想流居合の技法の精神を心法になぞらい、禪の言葉をかりて表現した伝書と考えられる。次にこの意識を試みる。

「そもそも此の兵衛（林崎新夢想流居合の技法）は、敵と対したとき、ただ自己黙然として前に進むことなく、後に退くこともなく、また左右に動くこともない。まさに無心にしてしかも敵の動きには間髪を入れずに対応する姿勢である。真実、生死の断崖に起ち、わが身の無事など頭をかすめることもなく、自ら生死の間に身を投げ入れてわが太刀に活殺をゆだねるところに居合の真随があるということだ。このように、生死の境に透徹した無心な自由を得てこそ、現世のいかなる順逆の世界にも迷うことなく、無心に遊ぶことができる。古人が云っている。世間の云う空は確かに空ではあるが、その空は△一切衆生、悉有佛性<sup>(じつうぶつじやう)</sup>△という意味にあたる。しかし真の空は、生死の境に身をおくことによって仏性の有無を超えたところにあるものだ、と。この兵衛（林崎新夢想流居合の技法）は、まさにこのようなものだ。」

## 参考

『山之井流居合術伝書』の「居合業」の一節（山之井流居合は、林崎流の末流、寛文年間成立）（今村嘉雄編『日本武道全集第七巻』所収。三一四頁）を参考に挙げておく。

「劔の鞘にあるを抜きはなす所居合也。似初なる所なれ共鞘を抜所に氣にひかれ心<sup>(こゝろ)</sup>の出るあり。無心にして無我

惟<sup>(ふだ)</sup> 臨機応変、手の柄<sup>(つか)</sup>に掛ると不<sup>レ</sup>掛毫厘の間に於て居合の工夫あり。太刀を抜くと思へば、必<sup>(かならず)</sup> 変<sup>(変)</sup>にをくれ、抜<sup>(ぬく)</sup>まじと思へば心滞留して太刀不<sup>レ</sup>抜、変に不<sup>レ</sup>応なり。我と我不<sup>レ</sup>知して変来れば手、刀の柄に掛り、抜<sup>(ぬく)</sup>と不<sup>レ</sup>思して刀鞘を離れて応ずる。——中略——居合とは人に切られず人<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>切。惟平らかに受留て勝と古人も教示なり。孟子曰、志は氣の師なり。氣は躰に充るなり。其志の指図に随ひ、一身に充の氣出て働く。其間に私の心を毫毛も不<sup>レ</sup>入事、居合の極意なり。以下略

# 9、「居合秘歌之卷 六」

卷子本

秘歌之大事 写真63

## ①千八品本草薬と聞しかと

とのやまひ<sup>(病)</sup>にとしら<sup>(短)</sup>て詮なし

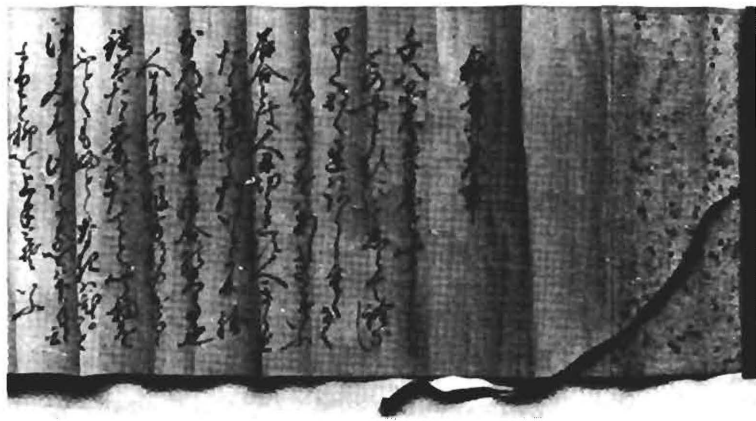
## ②早くなく遅ハあらし重くなく

かろき事<sup>(軽)</sup>をハあしきとそいふ

## ③居合とは人に切られす人きらす

た、請留<sup>(平)</sup>てたいらかに勝<sup>(か)</sup>

## ④本乃我に勝か居合の大事也



写真(63) 居合秘歌之卷・六「秘歌之大事」(1)①より⑥まで。

人にさかふハ非方なりけり<sup>(逆)</sup>

⑤ 鐐はた、拳のたてと聞ものを<sup>(種)</sup>写真<sup>(64)</sup>

ふとくもふとくなきハひかこと<sup>(太)</sup>

⑥ つよみにて行あたるをハ下手と云

まりと柳を上手とそいふ

⑦ 居合とは押詰ひしとおす刀

かたなぬくれハやかてつかる、<sup>(鑢)</sup>

⑧ 後よりたます手こそなかりけれ<sup>(唐)</sup>

こゑの抜とや是をいふらん<sup>(ぬき)</sup>注<sup>(1)</sup>

⑨ せはみにて勝を取へきな刀<sup>(狭)</sup>

短きかたな利はうすき也<sup>(底)</sup>

⑩ 世中に我より外の物なしと

おもふは池の蛙なりけり

⑪ 下手こそハ上手の上のかさり物<sup>(筋)</sup>

かへすくもそしりはしすな<sup>(筋)</sup>注<sup>(2)</sup>

⑫ 抜ハきるぬかねハきれる此刀<sup>(抜)</sup>

た、きる事に大事こそあれ<sup>(切)</sup>

⑬ 浮草をかきわけ見れハ底の月



写真(64) 居合秘歌之巻・六「秘歌之大事」(2)⑤より⑰まで。



爰に有とハいかてしられん<sup>(知)</sup>

⑭居合とは心にかつか居合也<sup>(勝)</sup>

人にさかふは非方なりけり<sup>(逆)</sup>

⑮いかに腹を立つゝいかるとも<sup>(怒)</sup>

心に刀こふしはなすな<sup>(拳)</sup>

⑯ひしとつく丁と留るハ居合也<sup>(ちよう)</sup>写真<sup>(寫真)</sup>

拔ぬに切ハ我をかいする<sup>(害)</sup>

⑰二人にハ勝れさりけり忍刀て

劔に恐れて手ハ出さりけり<sup>(弱味)</sup>

⑱居合とはよハみ斗て勝ものを<sup>(強味)</sup>

つよみて勝ハ非方なりけり<sup>(見)</sup>

⑲みよやミよ憂世を渡る濱<sup>(見)</sup>

魚と水とのかゝり火の影<sup>(義)</sup>

⑳世ハひろし折に寄りてそ替らん<sup>(広)</sup>

われしる斗よしと思ふな<sup>(我)</sup>

㉑白刃むかふ七つをたのミにて<sup>(向)</sup>

左り右りをなにと防む<sup>(注3)</sup>

㉒こんたいの両部の二つ見えにけり<sup>(金胎)</sup>



写真(65) 居合秘歌之巻・六「秘歌之大事」(3)⑬より㉑まで。

兵法あれは居合はしまる<sup>(始)</sup>

②③ いたらぬに免好をする人は<sup>(主)</sup>  
<sup>(ゆるしこのみ)</sup>

居合の恥を我とかくなり

②④ 寒夜にて霜を聞へき心こそ

敵に逢ての勝を取へし

②⑤ 執心のあらんにハつたふへし<sup>(伝)</sup>

<sup>(位)</sup>くらひ残すな大事なること

②⑥ 引もまよかゝるもまとハ知ながら<sup>(間)</sup>

<sup>(抜)</sup>ぬかぬに切は<sup>(きる)</sup>非方なりけり

②⑦ 切結ふ太刀に姿のかへらすは<sup>(姿)</sup>

<sup>(勝)</sup>かたれぬ迄もたのもしき哉<sup>(頼)</sup>

○天真正

林明神

林崎甚助 重信

田宮平兵衛照常

長野無楽斎謹露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

注

- (1) 「こゑの拔」は「声の拔」。<sup>な</sup>『林崎流居合指南秘伝之書』（今村嘉雄編『日本武道全集第七卷』所収、一二九頁）の「十二様之刀劍名之事」の項に「声の拔は位合の声をかけ打かくる刀也。こゑをかねに抜合する故、こゑの抜と号也」と述べている。
- また「位合」の項には「前略——<sup>（縦）</sup>後より声なく抜掛る共、敵修行有者なれば、其の位は我稽古之位に而、声なく打掛る共、其気色我胸にうつるもの也。其時ふりむき抜合なば、たがひに位を以なす事故、合ぬと云事有まじ。——後略」
- 結局、後より黙つてだまし打ちのようなことはする必要がない。声を掛けて「声の拔」で勝負する技法を体得せよということである。
- (2) 「そしりはしすな」は「<sup>（おし）</sup>誇りばしすな」で「誇りなんかするな」の意。
- (3) 「白刃むふ七つ」の「七つ」のこと。これは「七つの技」の意。
- (4) 『林崎流居合指南秘伝之書』（既出、二八五—二九〇頁）の「表身心持之歌」七首、「<sup>（みぎみ）</sup>右身之事」にある技七つ、「<sup>（ひだりみ）</sup>左身之事」にある技七つ、「<sup>（かへり）</sup>非返之事」にある技七つを意味すると思われる。
- (4) 「こんたい」は「金胎」のことで、「金剛界」と「胎藏界」の意。「大日如来理智の徳、すなわち其の心性より顕れたる諸相。」（中村元『佛教語大辞典』）

# 解説

1、林崎新夢想流居合の秘歌として二十七首掲載している。何れも、居合の心技についていろいろな角度から凝視し歌ったものと思われる。その流儀の技法や心法を歌に託し、道歌、印歌と称して伝書の行間に挿入したり、あるいは一巻にまとめることはよく行われていた。古くは慶長六年（一六〇一）二月、石舟斎柳生宗厳が金春流能の家元・竹田七郎に贈った「石舟斎兵法百首」が有名である。（今村嘉雄編『日本武道全集第一巻』一五三—

——一六六頁、既出)

2、今村嘉雄編『日本武道全集第七卷』(既出)に、林崎流居合の系統を引く流派の伝書が数巻収められているが、その中の「田村流居合目録」に「居合之歌」の項があり、そこに二十首が歌われている。(三六一—二六三頁)

右の二十首の中の十五首が、多少の言葉の使い方に違いがあるにしても、本資料の二十七首の中で重複している歌がある。その十五首というのは本資料の①②③④⑤⑥⑧⑨⑩⑫⑬⑮⑯⑰⑲⑳㉑㉒㉓㉔である。

また本資料にない「居合之歌」に次の五首がある。

①とうと出る 刀を思ひ 悟べし

夢想の刀 鐔はかまはじ

②みな人の 扇に風の 有りと云ふ

手にとらざれば 只紙と竹

③水鳥の ゆたかなりける 姿こそ

ゆたかにはなし 心ひまなし

④居合たて 深く執心 なるならば

大事残すな 大節の事

⑤我道の 居合一筋 相伝し

知らぬ兵法 ことな語るな

3、田村流の「居合之歌」(△印で示す)と重複しながら、その中でも多少なりとも言葉の使い方に違いのある歌

十二首を次に紹介する。

①千八品本草薬と聞しかと

とのやまひにとしらて詮なし

△千世の品 草木薬と 聞しかど

どの病にと しらでせんなし

②早くなく遅ハあらし重くなく

かるき事をハあしきとそいふ

△早くなく 遅くはあらし 軽くなく

重事をば あしきとぞいふ

③居合とは人に切られず人きらす

た、請留てたいらかに勝

△居合とは 人にきられず 人きらず

ただ請とめて 平にせよ

⑥つよみにて行あたるを下手と云

まりと柳を上手とそいふ

△つよみにて 行当をば 下手といふ

まりに柳を 上手とぞいふ

⑧後よりたます手こそなかりけれ

こゑの抜とや是をいふらん

△後より つくははづるる 事はなし

声の抜とは せめてかく也

⑩世中に我より外の物なしと

おもふは池の蛙なりけり

△世の中に 我より外の 物あらじと

思ふは池の 蛙なりけり

⑫抜ハきるぬかねハきれよ此刀

たゝきる事に大事こそあれ

△抜ばきれ 抜ずば切な 此刀

ただ物事に 大事こそあれ

⑬浮草をかきわけ見れハ底の月

爰に有とハいかてしられん

△浮草を かき分みれば 底の月

ここにありとは いかで知るべき

⑮人いかに腹を立つゝいかるとも

心に刀こふしはなすな

△人いかに 腹を立つつ いかるとも

こころと刀 こぶしゆるすな

⑯ひしとつく丁と留るハ居合也

拔ぬに切ハ我をかいする

△ひしとつく ちようと止るは 居合也

つかんに切ば 我を害する

⑰二人には勝れざりけり忍刀て

劔に恐れて手ハ出さりけり

△二人には 勝れざりけり たばかりて

つるぎに恐 手は出ざりけり

⑲いたらぬに免(ゆるしのぞみ) 好(ゆるしのみ)をする人は

居合の恥を我とかくなり

△至らぬに 免(ゆるしのぞみ) 望(ゆるしのぞみ)を するなどは

居合の恥を かかむそのため

4、言葉の使い方の違いによって、居合の心技に微妙な差異が生じてくる場合があると思われるが、同流儀の間で、いつ、どのような事情でこのような言葉の違いが生じてきたのかその経緯は詳らかにできない。

例えば②「早くなく遅ハあらし重くなく(軽) かるき事をハあしきとそいう」という歌が、前記「田宮流居合之歌では「早くなく 遅くはあらじ 軽くなく 重事をば あしきとぞいう」と正反対に表現している。後の歌は『田宮流居合 心和劔秘之巻 全』(『日本武道全集第七巻』所収)の「居合之極秘歌」にも同様に表現されているから書き誤りではない。それでは津軽弘前藩の林崎新夢想流の伝書の作者が故意に書き替えたものであろうか。この辺の事情が詳らかではない。

また、⑫「抜ハきるぬ(抜)かねハき(切)れよ此刀た、きる事に大事こそあれ」という歌が、「田宮流居合之歌」では「抜ばき(さる)れ 抜ずば切(き)な 此刀 ただ切事に大事こそあれ」となっていて、前者は「ぬかねハき(切)れよ」である。「抜ずは切(き)な」は「居合之極秘歌」にも同様の表現をしているから、これも書き誤りではない。やはり津軽弘前藩の林崎新夢想流の継承者が故意に書き替えたものであろうか。ただ「居合之極秘歌」に「ぬかずとも きれよ此太刀 ぬけてなを 切よ此太刀 はやき手の内」という真カケ流(陰)の歌を紹介している。詳しく論ずることはできないが、居合観の微妙な違いが、本資料の歌に替えさせたのではないかと思われる。

# 11、「均禄夢想居合極意之巻」

卷子本

均禄夢想居合極意之巻 写真 66

一之太刀 注(1)

口傳無量



抑此一之太刀といふハ均禄夢中に  
 一人之老翁(勿然)こつせんとあらはれ  
 汝林崎新夢想流居合数年遂  
 稽古劔術之極意依望深授

此妙術然に此太刀と云ハ懸の内に  
 待有彼の内に懸あつて懸待注(2)の

両部をかねたる秘術也故に

一之太刀といへとも万法自由に

して敵の變によく應ずる妙

術なり汝此太刀を以得大利云々

又老翁の曰對敵勝負の大事

極意秘密乃心法是也とて貝

からの中へ壱つノ玉を入れて二振

ふつて秘術無此外云々均禄

夢中に答貝から左右合たるハ

敵と我と合たる心也扱二ふり

振玉ふハ勝と負との二つなり

ひつきやう勝負の大事といへハ



写真(66) 均禄夢想居合極意之卷(1)



写真(67) 均禄夢想居合極意之卷(2)

此一心の外不有之と答其時

老翁よき哉／＼と云々写真 真

一、壺つ之目付之事

口傳

一、壺つ玉外物秘術之事

口傳無量

右此一巻ハ別而居合之極意均祿

夢想妙術之秘事たりといへ

とも林崎新夢想流居合被

遂数年稽古極意相傳之上

弥依御志深令授与早猶以

工夫無間断可有御執行者也

○老翁

夢想之年号

延寶八(二六八〇)  
庚申曆

浅利 伊兵衛

九月十一日

源均祿(朱印・花押)



写真(68) 均祿夢想居合極意之巻(3)

弟子中募執行尤

人柄可然人躰<sup>江</sup>可

傳授者也

注1、「一之太刀」「林崎流居合指南秘伝之書」(今村嘉雄編『日本武道全集第七卷』所収、二八四頁、既出)に「一之太刀」について

次の一節がある。<sup>たみや</sup>夫林崎流は、仕組事奥劔に至るまで、表身初太刀より出たるもの也。其根元、元師林崎甚助重信夢の内に林明神よりのけさの一太刀を得たり。扱明神袈裟の刀をおし<sup>教</sup>給うこと、全く人を害せよとのをし<sup>教</sup>ゑにあらす。——以下略」とある。また「表身心持之歌」のひとつに「初太刀こそ、神のをしゑし 袈裟刀 きるにはあらで かくるなりけり」とある。「口伝 量り無し」という浅利伊兵衛の「一之太刀」も、この林崎流居合の根本技を体得したのではないかと思う。

注2、「懸待」懸は攻めること、待は守ること。武芸に関する書で「懸待」の技と心の在り方について触れない書がない程述べられ語られている大事である。こゝでは「懸待一致」について説いている。つまり、かかることと守ることが同時に備わっていることの意味であるが、攻撃のみに集中していて攻撃の中に守備の体勢にすぐ移れる用意がなくてはならないことである。万一攻撃に失敗して逆襲されても、受けられる体勢があるようにすることを「懸待一致」といつている。これには、状況に応じて即座に対応できるように、技と体さばきの練習が必要であるし、また、必要以上に敏感に反応しては、かえってつけ込まれるので不動心の涵養も必要である。(笹間良彦『図説日本武道辞典』参照)

浅利伊兵衛は「一之太刀」にこの「懸待一致」を工夫体得したということであろう。

## 解説

- 1、この一卷は、浅利伊兵衛均禄自身が体得した「一之太刀」を、弟子中秀れたる人物に極意の巻として伝授しようとして書き残したものである。伊兵衛均禄の自信の程が伺える一卷である。
- 2、均禄夢想居合極意之巻

## 一之太刀

口傳無量

抑 <sup>(そしち)</sup>此の一之太刀といふは、均禄夢中に一人の老翁勿然と現われ、汝林崎新夢想流居合数年稽古を遂げ、劔術の極意、望み深きに依り此の妙術を授く。然るに此の太刀と云ふは、懸 <sup>(けん)</sup>の内に待 <sup>(た)</sup>有り、彼の内に懸あつて懸待 <sup>(けんたい)</sup>の両部を兼ねたる秘術也。故に一之太刀といへども、万法自由にして敵の変によく応ずる妙術なり。汝此の太刀を以って大利を得べしと云云。又、老翁の曰く、対敵勝負の大事、極意秘密の心法是れ也とて、貝殻の中へひとつの玉を入れて二振り振つて秘術此の外はなしと云云。(この意は何ぞと問われ) 均禄夢中にいわく、貝殻左右合わせたるは敵と我と合したる心也。さて二振り振り玉ふは勝と負との二つなり。必竟勝負の大事といへば此の一心の外これ有るべからずと答う。其の時老翁、よき哉よき哉と云云。

一、扨 <sup>(つ)</sup>つの(玉) 目付の事

口伝

一、扨 <sup>(つ)</sup>つの玉外物 <sup>(とのも)</sup> 秘術之事

口伝無量

右此の一卷は別して居合の極意、均禄夢想妙術の秘事たりといへども、林崎新夢想流居合数年稽古を遂げられ、極意相伝の上、いよいよ御志深きに依り授与せしめ早 <sup>(おそ)</sup>ぬ。なお以って工夫間斷無く御執行有るべきもの也。

弟子中執行 <sup>(つ)</sup>募り、尤も人柄然るべき人躰え伝授すべきもの也。

3、浅利伊兵衛均禄が、當田流太刀の當田甚五兵衛(後に半兵衛と改名) 吉正より最終的に「印可之卷」(「返起請文之事」)を受けたのは、延宝八年(一六八〇)九月十五日であった。本資料の日付「延宝八年九月十一日」はその「印可之卷」を受ける直前である。當田流太刀とともに、居合についても悟るところがあったと思われる。

4、浅利伊兵衛の居合の師は常井喜兵衛であるが、大酒家で破目をはすことの多かったこの師に代つて、実際は、七戸権右衛門や浅利伊兵衛が門弟を指導していたという。（『奥富士物語・巻四下』参照）この資料から推して、当時すでに相当な境地にあつたと思われる。

## 10、極意相傳之巻

卷子本

抑居合者奥州從<sub>レ</sub>林之<sub>（写真69）</sub>

明<sub>（注1）</sub>神夢想傳<sub>レ</sub>之夫兵法

者上<sub>レ</sub>古中<sub>レ</sub>古雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>数多<sub>一</sub>

此居合末世相應之太刀

手近之勝負一命之有

無極<sub>二</sub>此居合<sub>一</sub>恐於<sub>二</sub>粟散邊

土之界<sub>（注2）</sub>不審之儀不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之

唯靈夢依所也尋<sub>レ</sub>此<sub>（注3）</sub>始

或時奥<sub>一</sub>効林崎甚助謂者

依<sub>二</sub>兵法之望<sub>一</sub>林明<sub>一</sub>神

参籠満曉夢中告云汝

抑居合者奥州從<sub>レ</sub>林之<sub>（写真69）</sub>  
 明<sub>（注1）</sub>神夢想傳<sub>レ</sub>之夫兵法  
 者上<sub>レ</sub>古中<sub>レ</sub>古雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>数多<sub>一</sub>  
 此居合末世相應之太刀  
 手近之勝負一命之有  
 無極<sub>二</sub>此居合<sub>一</sub>恐於<sub>二</sub>粟散邊  
 土之界<sub>（注2）</sub>不審之儀不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之  
 唯靈夢依所也尋<sub>レ</sub>此<sub>（注3）</sub>始  
 或時奥<sub>一</sub>効林崎甚助謂者  
 依<sub>二</sub>兵法之望<sub>一</sub>林明<sub>一</sub>神  
 参籠満曉夢中告云汝

写真(69) 極意相傳之巻(1)

以<sup>(4)</sup>此太刀<sup>(4)</sup>常胸中憶持得<sup>(4)</sup>勝<sup>(4)</sup>寫真<sup>(70)</sup>

怨敵<sup>(4)</sup>云々則如<sup>(4)</sup>靈夢成得<sup>(4)</sup>大

利<sup>(5)</sup>腰刀以<sup>(5)</sup>三尺三寸一勝<sup>(5)</sup>二九寸

五分<sup>(5)</sup>表六寸而勝<sup>(6)</sup>之妙不

思儀之極位<sup>(6)</sup>一國一人之相

傳也腰刀三尺三寸者過現

未之三心三身則三寶也<sup>(7)</sup>

王法是為<sup>(9)</sup>三劍禪門有十<sup>(10)</sup>

八種劍六種劍十二種劍又<sup>(11)</sup>

是濟家宝中重代衲僧<sup>(12)</sup>

截斷修行也殺人刀活人<sup>(13)</sup>

劍都在<sup>(14)</sup>二掌握中<sup>(15)</sup>脇指九

寸五分者九品蓮葉劍<sup>(16)</sup>

出<sup>(17)</sup>離憂苦海中<sup>(18)</sup>生死魔

軍追倒釋道九曜五<sup>(19)</sup>寫真<sup>(71)</sup>

古之內證也是則為<sup>(20)</sup>二曹<sup>(21)</sup>

洞五位之秘訣<sup>(22)</sup>敵味方

以<sup>(4)</sup>此太刀<sup>(4)</sup>常胸中憶持得<sup>(4)</sup>勝<sup>(4)</sup>寫真<sup>(70)</sup>  
 怨敵<sup>(4)</sup>云々則如<sup>(4)</sup>靈夢成得<sup>(4)</sup>大  
 利<sup>(5)</sup>腰刀以<sup>(5)</sup>三尺三寸一勝<sup>(5)</sup>二九寸  
 五分<sup>(5)</sup>表六寸而勝<sup>(6)</sup>之妙不  
 思儀之極位<sup>(6)</sup>一國一人之相  
 傳也腰刀三尺三寸者過現  
 未之三心三身則三寶也<sup>(7)</sup>  
 王法是為<sup>(9)</sup>三劍禪門有十<sup>(10)</sup>  
 八種劍六種劍十二種劍又<sup>(11)</sup>  
 是濟家宝中重代衲僧<sup>(12)</sup>  
 截斷修行也殺人刀活人<sup>(13)</sup>  
 劍都在<sup>(14)</sup>二掌握中<sup>(15)</sup>脇指九  
 寸五分者九品蓮葉劍<sup>(16)</sup>  
 出<sup>(17)</sup>離憂苦海中<sup>(18)</sup>生死魔  
 軍追倒釋道九曜五<sup>(19)</sup>寫真<sup>(71)</sup>  
 古之內證也是則為<sup>(20)</sup>二曹<sup>(21)</sup>  
 洞五位之秘訣<sup>(22)</sup>敵味方

成事は亦前生之業<sup>注23)</sup>

感也生死一轉而百戰場<sup>注24)</sup>

中便大舜光土也如<sup>注25)</sup>此觀

事現世

魔利支尊天之護身符也

此居合千金賜以下<sup>レ</sup>貴但

於<sup>二</sup>實當之人<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>傳<sup>二</sup>附之<sup>一</sup>兵利

心懸者晝夜思<sup>レ</sup>之祈<sup>二</sup>神

明之息<sup>一</sup>得<sup>レ</sup>利正見依<sup>レ</sup>心濟<sup>二</sup>

身<sup>一</sup>耳

畢竟默然良久云

珊瑚枝々撐著月<sup>注27)</sup>

○天真正

林明神

林崎甚助 重信

田宮平兵衛照常

長野無樂斎權露

一宮左太夫照信

古之因縁、是爲前生  
洞立位、秘教、秘傳、  
感也、生死一轉、而百戰場  
中便大舜光土也、如<sup>レ</sup>此觀  
事現世  
利之尊天之護身符也  
此居合千金賜以下<sup>レ</sup>貴但  
於實當之人可<sup>レ</sup>傳<sup>二</sup>附之<sup>一</sup>兵利  
心懸者晝夜思<sup>レ</sup>之祈<sup>二</sup>神  
明之息<sup>一</sup>得<sup>レ</sup>利正見依<sup>レ</sup>心濟<sup>二</sup>  
身<sup>一</sup>耳  
畢竟默然良久云  
珊瑚枝々撐著月

写真(71) 極意相傳之卷(3)

谷小左衛門季正

常井喜兵衛尉直則

浅利伊兵衛尉殿

注

(1) 『奥州林之明神』 『本朝武芸小伝』(武道書刊行会編『新編武術叢書(全)』所収、八九―九〇頁。一九六八、人物往来社)の「林崎甚助重信」の項に「伝書には奥州楯岡の近辺に、林崎明神と云ふ神社あり。甚助此の神を祈りて妙旨を悟る」とある。

また、綿谷雪・山田忠文編『武芸流派大事典』(三八六頁、一九六九、新人物往来社)には、楯岡林崎明神として、「山形県村山市東根崎字楯岡、後に居合神社と俗称する」と出ている。

(2) 「粟散邊土」 「粟散国」(佛)小邦国の称。小邦国土の天下に散在するは、人の粟を把りて盤土に散置し、各方位を得しむるが如く、其の数甚だ衆多なるが故に云う。古、印度に小邦国二百以下ありしと伝う。我が国にて、古来自称して粟散辺土・粟散辺国・粟散片州などを云う。遂に転じて我が日本国の異称となれり。」(講談社『大字典』)

(3) 「林崎甚助」 前記『本朝武芸小伝』(この書は全十巻で天道流・日高繁高によって正徳五年(一七一四)書かれ、享保元年(一七二六)刊行された)に「林崎甚助重信は奥州の人なり。林崎の明神を祈りて刀術の精妙を悟る。此の人中興抜刀の始祖なり。(以下略)」とある。

また、前記『武芸流派大事典』(三八六頁)では、山田次朗吉氏の引用された『武術太白成伝』に拠ればと断り、次のように述べている。

甚助、名は氏賢、天文十七年(一五四八)相模生まれ。文禄四年(一五九五)四月十日(当時四十八歳)から慶長三年(一五九八)九月十五日までの四年間、武州一の宮(いま大宮市)の社地に住し、陰陽開合の理にもとづいて抜刀を工夫し、純白伝と号す。その後、諸国遍歴の旅に出て元和二年(一六一六)二月二十八日、武州川越の甥、高松甚兵衛をおとすれて翌年七月まで滞在。その後、七十三歳で奥州へ旅に出、爾後の消息は不明である。享保元年(一七一六)一宮流の奥幸四郎(高松甚兵衛の子の信之の門人)が施主になって、川越の蓮馨寺に墓碑を立て、甚助の生国、鎌倉材木座光明寺の過去帳に名をとどめた、という。

林崎甚助の抜刀術は、流名を神夢想林崎流というが、他に林崎夢想流、林崎流、林崎新夢想流、林崎神夢想などとも云われている。



る。

- (4) 「憶持」 ①仏教語。記憶を持ち続けて忘れないこと。心に思い念じていること。②思慮深く、分別のあること。

- (5) 「腰刀以三尺三寸勝九寸五分」 前記「夢想流」(今村嘉雄編「日本武道大系第三巻」所収)では「腰刀三尺三寸、以脇差九寸五分一勝」と表現している。本資料の後の方に「脇差九寸五分」とあるので、この「九寸五分」は「脇差」の意味である。従ってこの箇所は「腰刀三尺三寸と脇差九寸五分を以って勝つ」と表現しなければ意味が通らない。

- (6) 「表六寸」 前記「夢想流」及び「田宮流居目録」では「柄口六寸」と表現している。「柄口」とは刀の中子(なかこ)の入るべき「柄の口もと」のこと。

- (7) 「三身三心」 「三身」は仏の三つの身体。インドの大乗仏教において、仏について三つの身体を想定したという。その内容は經典によって必ずしも同じではないが、一例を挙げておく。法身。報身。応身。①法身は、形を超えた真如のさとりそのもの。②報身は、菩薩が願と行とに報われて得る仏身。③応身は、衆生を導くために相手に応じて現われる仏の身体。

- 「三心」 仏道を修行する者の必ずず修めなくてはならない三つの最も基本的な心の在り方。すなわち、戒心。定心。智心。①戒心は、悪をとどめ、善を修すること。②定心は、身心を静かにして精神統一を行ない、雑念を払い、思いが乱れないようにすること。③智(慧)心は、その静かになった心で、正しく真実のすがたをみきわめること。この不即不離の兼修が、仏道修行の完成をもたらすといわれる。(中村元『佛教語大辞典』)

- (8) 「三宝」 三つの宝の意。仏。法。僧。さとりを開いた人(仏)と、その教え(法)と、それに奉ずる教団(僧)の三つをいう。仏(さとりを開いた教えの主)・法(その教えの内容)・僧(その教えを受けて修行する集団)の三つを宝にたとえた語。これは仏教を構成する三つの大切な要素である。三宝に帰依することは仏教徒としての基本的条件である。(中村元『佛教語大辞典』)

- (9) 「王法」 ①国王による政治。国王の定めた法令。②帝王が守るべき正法。③世法に同じ。仏法に對する。(中村元『佛教語大辞典』)

- (10) 「三剣」 三振りの剣。莊士が趙の文王に説いた三つの剣。すなわち、天子の剣は天下の形勢を知るに在り、諸侯の剣は人材の賢否を知るに在り、庶人の剣はただ一人の勇のみとの喩。(諸橋轍次『大漢和辞典』)

- (11) 「十八種剣、六種剣、十二種剣」 『佛教語大辞典』には載っていないが、「十八界」を断ち切る剣、「六根」を断ち切る剣、「十二因縁」を断ち切る剣を意味しているのではないかと思われる。

「十八界」とは、人間存在の十八の構成要素。六根と六境と六識をいう。十二処のうち六つの内的な場における識別作用をそれぞれ別に数えて、それらの間における対応関係を明示したもの。すなわち(1)眼と色・かたちと視覚、(2)耳と音声と聴覚、(3)鼻と香りと

嗅覚、(4)舌と味と味覚、(5)皮膚と触れられるべきものと触覚、(6)心と考えられるものと心の識別作用である。六根（眼・耳・鼻・舌・身・意の六つの知覚器官）と六境（色・声・香・味・触・法の対象の世界）と六識（眼・耳・鼻・舌・身・意の認識作用）とを合わせて十八となる。十八の要素、これらが個人存在を構成する。主客すべての世界。

「六根」とは、六つの器官。六つの感覚器官。六つの認識能力。視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の五つの感覚器官と、認識し思考する心。眼・耳・鼻・舌・身・意のこと。根は認識器官を意味する。眼・耳・鼻・舌・身・意が、その対象に対して感覚・認識作用をする場合、そのよりどころとなる作用を有するもの。すなわち、視覚器官（視神経）とそれによる視覚能力（眼根）、以下、聴覚（耳根）、嗅覚（鼻根）、味覚（舌根）、それと触覚器官や触覚能力（身根）の五根を、思维器官とその能力（意根）とを合わせて六根となる。五根を物質的存在である色法というのに対し、意根は心の外面的なはたらきとして心法といわれる。

「十二因縁」とは、人間の苦しみ、悩みがいかにして成立するかということ考察し、その原因を追求して十二の項目の系列を立てたもの。存在の基本的構造の十二区分。おくれて成立した解釈によると、衆生が過去の業により現世の果報を受け、また現世の業により未来の果報を受ける因果の関係を十二に分類して説いたもの。(1)無明（無知）、(2)行（潜在的形成力）、(3)識（識別作用）、(4)名色（名称と形態、または精神と物質、心身）、(5)六処（心作用の成立する六つの場、眼・耳・鼻・舌・身・意）、(6)触（感官と対象との接触）、(7)受（感受作用）、(8)愛（盲目的衝動、妄執、渴きにたとえられるもの）、(9)取（執着）、(10)有（生存）、(11)生（生まれること）、(12)老死（無常なすがた）、をさす。順次に前のものが後のものを成立させる条件となつていく。順次に前のものが減すると後のものも減する。（中村元『佛教語大辞典』）

この「六識」と「十二因縁」については、柳生十兵衛三厳が寛永十九年（一六四二）二月『月之抄』（今村嘉雄編『日本武道全集 巻一』二一八―二九頁参照、既出）の「天地之種子の事」の項に書いている。父柳生宗矩より教えられたが難しくて理解できず、十兵衛三厳は沢庵和尚を尋ねている。武者者にとつて知りおかねばならぬことなのであろう。

(12) 「済家」 臨済家の略。

(13) 「衲僧」 「衲」は衣の意。こゝでは禪僧と思われる。

(14) 「截断」 平田高士著『禅の語録18 無門関』の「黄龍三関」（一七八頁）ではこれを「せいだん」としているが、中村元『佛教語大辞典』や諸橋轍次『大漢和辞典』等の辞典では「せつだん」と読ませている。また、慶長六年（一六〇二）二月、柳生石舟斎宗厳が金春流申樂家元・竹田七郎氏勝に与えたという「新陰流兵法目録等」に「斬釘截鉄」という刀法があり、やはり「截」は「せつ」である。仏教上の読み方があるのかも知れないが、本稿では漢和辞典に従い「せつだん」とする。

意味については、中村元『佛教語大辞典』では「断ち切ること。△『碧巖集』八則△『反故集』△』としている。『碧巖集』第八則

翠巖夏末衆に示す」の「評唱」に「截断」の語は見えるが難解である。

武芸書では、沢庵宗彭（一五七三—一六四五）が柳生但馬守宗矩に与えたと伝えられる『不動智（神妙録）』に「截断」と意味の上で極めて近いと思われる「前後際断」という用語がある。「前後際断」も武道修行者にとっては難関のひとつであるが、沢庵は次のように解説している。

「前後際断と申す事に候。前の心をすてず、又、今の心を跡へ残すが悪敷候なり。前と今との間をば、きつてのけよと云ふ心なり。是を前後の際を切て放せという義なり。心をとどめぬ義なり」（今村嘉雄編『日本武道大系第九巻』所収、『不動智神妙録』七三頁、既出）

本資料の「截断」は、「前」と「今」の断ち切りだけではなく、「十八種の劔」「六種の劔」「十二種の劔」による断ち切りになるが、『不動智神妙録』の心底で臨めば理解し易いように思われる。

(15) 「殺人刀・活人劔」 この語は、寛永九年（一六三二）九月に柳生但馬守宗矩がまとめ上げたという『兵法家傳書（進履橋）

「殺人刀」「活人劔」の総称』に見える。この書は、いわゆる劔禅一致を説いた武芸者によるわが国最初の伝書であるが、この時の「殺人刀」「活人劔」の用語は『碧巖録』からの引用と云われている。（今村嘉雄編『日本武道大系第一巻』九四頁参照）たしかに『碧巖録』の「第十二則・洞山麻三斤」の「垂示」に「殺人刀」「活人劔」が述べられている。（朝比奈宗源訳註『碧巖録・上』（岩波文庫、一六八頁）

意味は、禅僧が修行者を教導する際の、活殺自在のはたらきを刀劔にたとえて示したもの。斬る刀と救う刀。生かす殺すのはたらきが自由なこと。すぐれた道力を刀にたとえた表現。（中村元『佛教語大辞典』）

(16) 「九品」 極楽往生の九種類の等級。

(17) 「出離」 生死を繰り返す迷いの世界を離れ出ること。煩悩の束縛を離れ出ること。（中村元『佛教語大辞典』）

(18) 「釋道」 仏教と道教。こゝでは仏道の意か。

(19) 「九曜」 九個の天体。七曜（日曜星・月曜星・火曜星・水曜星・木曜星・金曜星・土曜星）に、日月蝕を起こさせる触星である羅喉星と慧星である計都星とを加えたもの。（中村元『佛教語大辞典』）

(20) 「五古」 五牀・五鉢とも書く。五股・杵・五股金剛杵の略。昔のインドの武器の一種。もと雷をかたどったともいう。仏教では象徴的に用いて迷いを破る武器をいう。（中村元『佛教語大辞典』）

(21) 「内證」 ①自己の心のうちで真理をさとること。心のうちに体験するさとり。②内面的に直接に知ること。（中村元『佛教語大辞典』）

(22) 「曹洞五位」 「洞山五位」と同義ではないかと思われる。曹洞宗の開祖洞山の説くところであって、洞山五位説、君臣五位と

もいう。真理を正位と立て、事物を偏位とし、君位・臣位・君視臣・臣向君・君臣合の五位をもって事と理との交渉のことわりを示したものの。(中村元『佛教語大辞典』)

(23) 「前生」 ①前世。さきの世。前の世の生涯。②先に生起している、の意。(中村元『佛教語大辞典』)

(24) 「業感」 善悪の行為の原因によって苦楽の果報を感じ生ずること。(中村元『佛教語大辞典』)

(25) 「大舜光土」 「大舜」は「舜」の美称か。「舜」は中国五帝の一「虞舜」。「堯」に挙げられて政を摂し、四凶を除き天下大いに治まる。政を摂すること三十年、「堯」の禪を受けて帝位に即き、治績大いにあげたという。

「光土」は「光明土」か。「光明土」は「無量光明土」の略で、西方極樂国のこと。(中村元『佛教語大辞典』) こゝでは浄土のことと思われる。

(26) 「正見」 ①正しい見解。②ありのままに観すること。③正しく自心の実相を知ること。(中村元『佛教語大辞典』)

(27) 「珊瑚枝々撐著月」 「珊瑚枝々月を撐著す」と読む。この言葉は『雪竇頌古』(『禪の語録15・雪竇頌』入矢義高他訳、二七七頁参照)の「第百則・巴陵吹毛劍」の「本則」と「頌」に出ている。また『碧巖録』の「第一百則・巴陵吹毛劍」(『岩波文庫・朝比奈宗源訳註『碧巖録・下』の「本則」と「評唱」「頌」二度目の「評唱」二四五—二五三頁参照)にも出てくる。

訳については、前書の入矢義高は「月をささえた珊瑚の枝枝」とし、後者の朝比奈宗源は、この書の性格から「撐著」の語を「ささえる」とのみ訳し、全体については触れていない。また、大森曹玄は『碧巖録・下』(三四五頁、一九八八、柏樹社)で「それは珊瑚が枝々に月の光を映しているようなものだ」と訳し、在家修行者・藤本治は『無の道・碧巖の話』(二二頁、一九八七、春秋社)で「珊瑚の枝々に明月が宿ったようなものだ」としている。このように前後の文を略して「珊瑚枝々撐著月」の言葉をとりあげて訳しても、本意はつかみ難い。ただ『碧巖録』の「本則」のこの言葉の次に「光万象を呑む。四海九州」と敷衍らしい語がある。大森曹玄はこゝのところを「吹毛の劍は宇宙万象を呑んでしまったわい」と明快に述べている。

次に『雪竇頌古』の「巴陵吹毛劍」の全文を、入矢義高の書き下し文と訳を参考に挙げておく。

挙す。僧、巴陵に問う、「如何なるか是れ吹毛劍。」陵云く、「珊瑚は枝枝に月を撐著す。」

(二五)

頌に曰く

不平を平らかにせんと要して、大巧は拙なるが着し。  
或は指し或は掌して、天に倚りて雪を照らす。大治も磨磨し下さず、良土も払拭すること未だ歇めず。別、別。珊瑚は枝枝に月を撐著す。

〔本則〕

僧が巴陵にきいた、「吹きかけた毛が切れおちる劔とは。」巴陵、「月をささえた珊瑚の枝枝。」

頌

いざこぎにケリをつけようとする劔の手なみは、拙劣とも見える名人芸だ。

（この劔は）時には指となつて働き、時には平手となつて飛んで、（また）天にかざされては雪もあざむく輝きようだ。

この劔こそは名だたる刀士も研ぐことかなわず、どんな名士も拭う手をとめられまい。

おっと、まだまだ。月をささえた珊瑚の枝枝よ。

本資料に添つていえば、「林崎新夢想流居合」はまさに宇宙万象を吞みつくす絶対最高の劔であるということ。これを禪語をかりて表現したのではないかと思われる。

## 解説

1、津輕弘前藩の林崎新夢想流居合で常井喜兵衛直則より浅利伊兵衛均禄に授与した伝書七巻の最後の巻である。すなわち、同流の由来と刀劔の意義、刀法心法等を記し、唯授一人の相伝の書として流儀最奥を傾倒した内容となっている。それだけに難解である。

2、一部分であるが、本資料と似た文章が「田宮流居合目録」（今村嘉雄編『日本武道全集・第七巻』所収、二二六頁、既出）の最後と、「夢想流」（上原権右衛門秀信系）（今村嘉雄編『日本武道大系・第三巻』所収、五一八頁、既出）にある。

しかし本資料の方がより詳細で充実した文となっている。従つて長文でもある。

3、「そもそも居合は、奥州林之明神夢想より之を傳う。

夫れ兵法は、上古、中古より数多有りと雖も、此の居合は末世相応の太刀、手近かの勝負、此の居合に極ま

る。恐らくは粟散辺上の堺に於いて不審の儀有るべからず。ただ霊夢に依る所なり。

此の始めを尋ぬ。或る時、奥州林崎甚助と謂う者、兵法の望みに依り、林明神百ヶ日参籠の満暁、夢中に告げて云わく、汝此の太刀をもつて常に胸中に憶持し、怨敵に勝ち得ると云々。則ち霊夢の如く大利を成し得たり。腰刀三尺三寸を以つて九寸五分に勝ち、表六寸にて之に勝つ。妙不思議の極位、一国一人の相伝也。

腰刀三尺三寸は過現末の三心三身、則ち三宝也。王法是れ三劔と為す。禅門に十八種の劔、六種の劔、十二種の劔有り。またはれ済家、宝中、重代、衲僧の截断修行也。殺人刀活人劔(すく)都て掌握中に在り。

脇差九寸五分は九品蓮葉劔憂苦海中に出離し、生死魔軍追倒釋道九曜五古の内證也。是れ則ち曹洞五位の秘訳と為す。

敵味方と成る事、是れ亦前生の業感也。生死一体にして百戰場(すなわ)便ち大舜光土也。此の如く観ずる事現世なり。

魔利支尊天の護身符也。此の居合は千金賜わるを以つて貴からず。但し実当の人に之を伝附すべし。兵利に心懸ける者、昼夜之を思い、神明の息に祈りて利を得る。正見は心に依り身を済めるのみ。

畢竟默然(やや)良(や)久しくして云わく

珊瑚(さんご)は枝枝に月を撐(しん)著す。

#### 4、右の意訳

もともと居合は、奥州林崎明神の霊夢をもとにして練られた劔として伝えられてきた。

兵法は、上古、中古から数多くあるにしても、その中でも林崎新夢想流居合は、現世で最高の太刀さばきであり、いざ勝負のときにこの居合にまさるものはない。このことはおそらく日本において疑うべくもない事実

であろう。これは偏えに靈夢によるものである。

この流儀の始源を尋ねてみるに、かつて奥州に林崎甚助というものがいたが、この人物兵法達成の望みが殊の外強かった。そこでこの望みを達すべく林崎明神に百日の願をかけた。その最後の満願の日の明け方、明神より太刀さばきを告げられたのである。云わく、汝この太刀さばきを常に忘れず念じれば、いかなる敵にも勝ち得るであろうと。果してその太刀さばきによって勝利を得ることができた。何れも腰刀長さ三尺三寸、脇差九寸五分、柄六寸のさばきによって勝ち得たのである。その太刀さばきたるや、まことに普通では考えられない絶対最高の位にあり、一国にただ一人授けられるものである。

さて、腰刀の長さ三尺三寸は、過去・現在・未来の三心三身すなわち仏・法・僧の三宝を意味している。また仏法によらずとも王法にも三劔があるという。禪門には十八種の劔、六種の劔、十二種の劔といつて、仏法によって俗世間の迷妄を断ち切る劔がある。このことは、臨済宗初祖以来の修行僧の截断修行そのものである。例えば「殺<sup>せつ</sup>仏殺<sup>ぶつ</sup>祖<sup>そ</sup>」というように、仏に帰依して仏に惑わされず、初祖の法語に溶け込んで初祖に惑わされずという、截断・活殺自在のはたらきなど、すべて三尺三寸の掌握中にあるということだ。

脇差九寸五分は、あらゆる煩悩の束縛からはなれ、群がり襲いかかる生死の迷いや愛欲を追い払う仏道の武器たることのあかしである。九寸五分には、このように曹洞宗初祖以来の秘められた意味がある。

人間、ときにおいて敵味方となることは、前世の何らかの因縁によるものであろう。死ぬも生き残るも、両者によって戦いの場は即極楽浄土への道である。戦いの場をこのように観念すること、まさに日々の如しである。

この居合は、護身の神・魔利支尊天の守り札である。たとえ千金万宝を積む者があっても誰彼に伝授しては

ならない。真実にこの居合の心技の達成を強く望む者にのみ伝えるべきである。

勝負に勝つことを心懸ける者は、昼夜にわたって心技を工夫し、そして神明にその成就を祈ってこそ達成することが出来る。心技の悟りは、ひたすら心身の清めにかかっていることを知るべきである。

林崎新夢想流居合とは何ぞや

究極において言葉など不要。しかし敢えて表現すれば

珊瑚が枝々に月の光を映しているようなものだ。(絶対最高の劔ということだ。)

## 12、居合許印可太刀心持之事

写真 72

卷子本

軸がなく巻き紙風の形式である。  
印章の類は押されていない。

向之次第 付太刀数之次第 (つけたり)

一、押立 二、押抜 三、防身 四、除身

五、幕越 六、胸刀 七、頭上

左身之次第 太刀数之次第

一、開抜 二、左足 三、鞭結 四、肢去抜

五、向足



右身之次第 太刀数之次第

- 一、突入
- 二、抜詰
- 三、手取扱
- 四、柄取
- 五、臥足

許外物之次第

- 一、切先返 カケ有左右兵ニ  
前後
- 一、頂上
- 一、二方詰 太刀四ツ  
前後 許之内也

左身之中ニ付

- 一、打留
- 一、切留
- 一、山越 歌ノ卷  
手ツキ

右身之中ニ付

- 一、柄取
- 一、逆手
- 一、左向共 萬事抜  
千金位

印可之太刀数之次第 写真 72



写真72 居合許印可太刀心持之事(1)

左行合 立合

右立合

走通 あふ玉の抜  
逢無

大脇指太刀数之次第

向二つ 右三ツ 左之ヒザニ付一ツ

立合二ツ 右同一ツ 左小脇差之心持一ツ

柄取色ニ付而数多

下緒之大事

目付拔萬事ニ渡ル

心持三段之事 大用  
二心二心

サク事

カクモ有

ノル事

ノスルモ有

イキル事

イカスモ有

ツヨミノ事

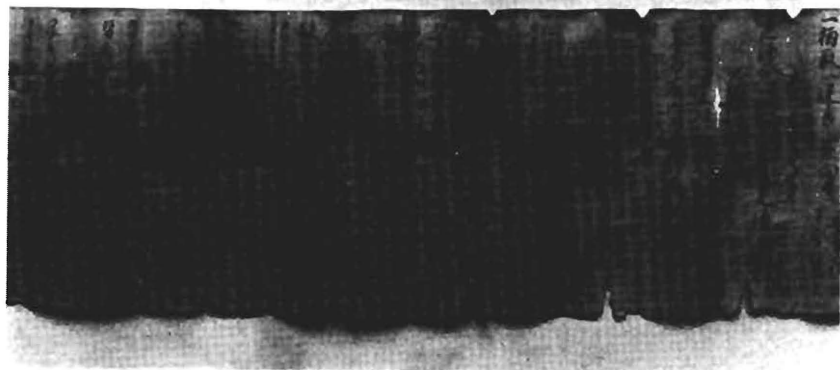
ツヨミイタスモ有

ワカレロノ事

ワカレサスルモ有

ウツル事

ウツスモ有



写真(73) 居合許可太刀心持之事(2)

スム事

スマスモ有

心持之大事

大氣大用

一心ヨリ二心萬事ヲ抜

殺活ノ二ツ

キレイノハダエ

カマイノ中ヨリカマイヲヌクル事

拍子用之事

カルイ拍子

人ノ拍子カル事

悪三段之事

ナマリケ

サビケ

悪心持之事

カマイヲヌク事

ケナゲナハダエ之事是

皆悪事也 可秘々ト云

惡拍子之事 写真 70

ツヨキ拍子      シタウ拍子      アト拍子

ヲモイ拍子      ウク拍子      大拍子

許

萬事ノ拔ハ太刀取

萬事ヲトナレバ拍子ニ付テヌク

十二用

無字鉄貫千萬重誰透此字徹那邊

印可外物

一、取違 二、寄足 三、寄身 四、懸蜻蜒

五、逆手 六、胸刀 七、逆頭上

五ヶ之次第

一、懸身 二、待身 三、右懸 四、左懸 五、聲拔



写真(74) 居合許印可太刀心持之事(3)

## 胸刀色ニ付而七ツ有

- 一、懸大嵐 一、待大嵐 一、押入 一、雲入 一、洞  
 入 一、天車切留 一、四方詰 一、切刃 一、逢無拔  
 一、下刀 一、手離拔

千機アヤツル也女ノヲルハタモノ也  
生死ノサカイニ至テセツナノ事也

キトハ 念也未起處也弓ヲ張テ切ハナサスセヘテ

置ヲ機ト云也自由傳反自在ノ處也

右ハ権右衛門聞書善之丞へ相傳と棟方氏之申候  
 得共殊外書ヨシ分明ナラストイヘトモ大方如此  
 書写置者也手鑑(鏡)ノ下書ノヤウニ相ミヘ候へ共  
 少手力、ミト違候處有之

## 居合許之書物

- 一、向次第之卷 二、右身卷 三、左身卷 四、外物許

卷 五、歌ノ卷 六、手鑑卷 外ニ許状是斗也

# 解説

1、本資料は七戸権右衛門による常井喜兵衛からの聞き書きである。これが松山善之丞、棟方嘉兵衛の手を経て浅利伊兵衛に渡ったものである。

2、居合の心技にわたる微細な点まで記載しており、19「居合印可心持事」と重複している所が多い。浅利伊兵衛は19「居合印可心持事」を「居合手鏡」とし、本資料をその「下書」<sup>したかき</sup>ではないかといっているが、必らずしも同じではない。

3、修業習熟の段階によって「許」より「印可」へと進む形式をとっているようである。「許」の段階での伝書は「向次第之巻」「右身之巻」「左身之巻」「外物許之巻」「歌之巻」「手鑑之巻」である。ただし寺山家所蔵に「手鑑之巻」が見当らない。

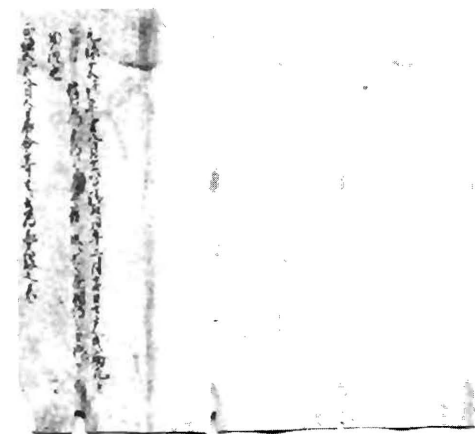
## 13、高上極位夢想心鏡 明鑑之巻

卷子本

本資料は表紙が切れて外題は不詳。

ただし、表には細字で次のような覚え書き様の添え書きがある。

「元禄十五年<sup>(一七四二)</sup>閏八月十六日請取 同年二月十四日七戸氏病死と□□(以下数字不明) 権右衛門



写真(75) 高上極位夢恵心鏡・明鑑之巻。

表の添え書きは判読し難い箇所がある。

末端□□置(江書) 善之亟へ□□通相傳□□棟方氏ノ物語也

「正徳五(二七一五)乙未八月五日居合印可共二書写夢想之卷」写真(76)

高上極位夢想心鏡明鑑之卷写真(76)

抑居合夢想明鑑至極之秘術

動靜默然而終逢鋒刀注(1)無進無

退而打發是如奪得関將軍太刀注(2)

入手於生死岸頭得大自在向六道四注(3)

生一超直入如來之地得本莫愁末注(5)

如誠瑠璃含寶刀不求真不斷注(7)

妄了知二法空而無相也無相無窮無注(8)

不空即是真實之相心鏡明鑑無

礙右之兵術是也可秘唯授一人

承應三(一六五四)甲午曆極月五日之満晚會

告夢中爭

常井 喜兵衛注(76)

右者常井喜兵衛夢想之卷喜兵衛自筆

ニテ書記被置候ヲ七戸権右衛門へ相傳被申候注(76)



写真(76) 高上極位夢想心鏡明鑑之卷。末にも添え書きがある。

夫<sup>(一七〇)</sup>元禄十五年閏八月十六日権右衛門妻子衆

と松山善之丞<sup>注12</sup>へ相傳 権右衛門右同年二月十四日死

亡 善之丞及末端棟方嘉兵衛<sup>注13</sup>へ相傳 夫<sup>注14</sup>と浅利伊兵

衛居合ノ印可不殘申請候書物斗ニ而傳授事一圓無之

## 注

(1) 「鋒刀」 鋒はホコ、軍の先勢、鋭い勢のことであるが、こゝでは鋭い太刀の意。

(2) 「打発」 突如として打つ。

(3) 「如奪得関將軍太刀入手」 「関將軍の太刀を奪い得て手に入るが如し。」と読む。「無門関」の「第一 趙州狗子」(平田高士

「禪の語録18・無門関」一四―二〇頁参照、既出)に出ている。

「関將軍太刀」。「無門関」では「太刀」でなく「大刀」である。「三国時代の劉備の臣であつた関羽の所持した長柄の大刀」を指しているが、禪の上では「あらゆるものを截断して残さぬ」という意があり、「無」の一刀で分別意識をたち切ることである。

「蜀の劉備の臣で天下に豪勇を轟した関羽からその得意の太刀を奪いとおのれの武器としたこと」と訳すが、こゝでは次の語句「於生死岸頭得大自在」と連動し「無」の一刀の意が伏せられている。

(4) 「於生死岸頭得大自在」 8「居合外物次第 五」の「高上極位之巻」の注3参照。

(5) 「一超直入如来之地」 「一超直入して如来の地とならん」と読む。「迷妄から一氣に、何ものにもさえぎられることなく仏の境地に至るであらう。」ということ。

(6) 「得本真愁末」 「本を得て末を愁うるなかれ」「根本を体得して、生死がどうのと末々のことを愁うるようなことはするな。」という意。

(7) 「如誠瑠璃含寶刀不求真不断妄」 「誠に瑠璃は宝刀を含み、真を求めず妄を断たざるが如し。」

「瑠璃」(琉璃)は七宝のひとつで、つやのある青い寶石のことであるが、『雪寶頌古』の十八則「肅宗と忠国師の無縫塔」(「禪の語録15・雪寶頌古」五六―五九頁参照)の意にならい、こゝでは「浄土」と理解する。

まことに浄土は、「無」の一刀のような宝刀を含んでいて、それ故に、殊更に真を求めるとか迷妄を断とうとかあがくようなこと



## 解説

はしない——ということ。

(8) 「了知」 「了」認識すること。明らかにすること。「知」知ること。さること。了知は明らかにさること。

(9) 「空」 最も難解な箇所のひとつであるが、こゝでは、正保二年(一六四五)五月十二日、宮本武蔵が寺尾孫之丞にあてた『五輪書』の「空の巻」(今村嘉雄編『日本武道全集・第一巻』四九〇—四九二頁参照、既出)の一節を引用して注としたい。

「空といふ心は物毎のなき所、しれざる事を空と見たつる也。勿論空はなきなり。ある所をしりてなき所を知る、是則空也。世の中におゐてあしく見れば、物をわきまへざる所を空と見る所、実の空にはあらず、皆をよぶ心なり。此兵法の道におゐても、武士として道をおこなふに士の法を知らざる所、空にはあらずして、色々まよひありてせんかたなき所を空といふなれども、是実の空にあらざる也。武士は兵法の道を髓に覚へ、其外武芸を能つとめ、武士のおこなふ道少もくかららず、心のまよふ所なく、朝々時々におこたらず、心意二つの心をみがき、観見二つの眼をとき、少もくもりなく、まよひの雲の晴れたる所こそ、実の空と知るべき也。」

(10) 「常井喜兵衛」直則(なおのすけ)。本資料の巻物では常井喜兵衛直則と書かれているが『奥富士物語・巻10下』では「則直」とし「青森県人名大事典」も「則直」としている。

出自については不詳であるが「羽州」生まれで秋田牢人と云われる。津軽弘前第四代藩主信政が居合武芸者として「貳百石」で召し抱え、「御手廻」「御馬廻」。武芸は一流であつたが大酒豪で不行儀もあつたらしい。門弟数も多かったが、その中でも傑出していた七戸権右衛門・浅利伊兵衛が門弟指導に當つていたという。伝系にみられるように浅利伊兵衛均祿の師匠に當る人物である。

(11) 「七戸権右衛門」『奥富士物語・巻四下』によれば「七戸五太夫(権右衛門)、二百五十石にて物頭、宝曆初め頃死去」という。常井喜兵衛の高弟で浅利伊兵衛の兄弟子に當るようであるが、元禄十五年二月十四日死去している。

(12) 「松山善之丞」常井喜兵衛の門弟、七戸権右衛門の弟弟子に當る。

(13) 「棟方嘉兵衛」常井喜兵衛の門弟、七戸権右衛門の弟弟子に當る。

(14) 「書物斗二而傳授」伝授の方法には三通りある。一、業(術技)の伝授 二、口伝 三、書伝。浅利伊兵衛は松山善之丞より書伝を受けたことであろう。当居合の術技については常井喜兵衛より直接指導を受けていたものと思われる。

1、本資料は津軽弘前第四代藩主信政に、武芸優秀なる故をもって二百石で召し抱えられた林崎新夢想流居合の

常井喜兵衛直則が書き残した一巻の写しである。浅利伊兵衛均禄が常井喜兵衛より授与された「高上極位之巻」の原本と思われる。また、伊兵衛均禄が「均禄夢想居合極意之巻」をつくる端緒となった一巻であったとも思われる。

2、この一巻が伊兵衛均禄のもとに至る経緯は、文末の添え書きにある。すなわち、常井喜兵衛が自筆で書いておいたこの「夢想之巻」を、高弟七戸権右衛門へ相伝したが、同権右衛門が元禄十五年（一七〇二）二月十四日死亡したので、その妻子より同年閏八月十六日権右衛門の弟弟子松山善之丞へ伝え、善之丞から更に棟方嘉兵衛に渡り、それから伊兵衛均禄へと伝えられたというのである。それが正徳五年（一七一五）八月五日のこととで、その時には「夢想之巻」のみではなく、林崎新夢想流居合の印可に関する書物一切であつたらしい。

3、本資料の本文について

#### 高上極位夢想心鏡明鑑之巻

抑（おそそも）居合は夢想明鑑至極の秘術、動靜默然として終る。鋒刀に逢い進むことなく退くことなくして打発（だはつ）す。是れ関（かん）將軍の太刀を奪い得て手に入るが如し。生死岸頭に於いて大自在を得、六道四生に向かい一超（いちじょう）直入（ちよく）ゝ如来の地とならん。本を得て末を愁（うれ）うるなかれ。誠に瑠璃は宝刀を含み、真を求めず妄を断たざるが如し。了知二法は空にして無相なり。無相は無空・無不空即ち是れ真実の相、心境明鑑（むぎげ）無礙（むげ）なり。右の兵術是れなり。秘すべし、唯授（ただいづ）一人。

4、右の意訳

そもそも居合は、澄みきつた静かな心境の極致にある秘術である。その秘術たるや、動にして静、静にして動、つねに平常心のうちに黙然と大事を済まし終えるものだ。たとい、いつ、いかなる時に鋭い太刀に逢つても、少

しも惑わず、進むことなく退くことなく、間髪を入れず対応して打つ。これは、かの著名な中国の猛将関羽の大事にしている大刀を奪いとおのれの武器とするようなもので、明鏡な心であればこそ、平常心のうちに機に臨み変に応じてこのような難事をやっけることができる。

まさに明鏡心は、生死の岸頭に直面して悠々とこれに応じ、現世の順逆の境にあって直ちに仏の境地に至らしめるものである。この心境に至れば、生死がどうの現世の境がどうのと悩むことはない。このことは、まことに、浄土が宝刀を内在している故に、殊更に真とは何かなどと求めたり、迷妄を断ち切ろうとあがいたりはしないのと同じことだ。

——さることと知ることの二法は空であつて実体があるのではなく無相である。無相は、知るべきことも知らず、学ぶべきことも学ばず——というのではなく、知るべきは知って少しも闇いところがなく、学ぶべきことは奥の奥まで学びきつてこそ無相という。これが真実の相というものだ。ここにこそ心鏡明鑑、何ものにも妨げられず、何ものにもとらわれない自由自在がある。これが林崎新夢想流居合の極致である。それ故にこの秘伝は軽々に伝えてはならず、伝えるに足る人物唯一人に相伝すべきである。

#### 14、居合印可十二用之次第

卷子本

本資料は先が欠損のため標題は不詳。ただし表に細字で次の覚え書き様の添え書きがある。人物画はない。

「正徳四<sup>二七一五</sup>  
乙未年八月五日棟方氏より伊兵衛我等御相傳書写」

「居合印可十二用之次第」

林崎新夢想流居合

極位秘術唯授一人

目録

十二用次第 写真(7)

第一

第二

第三

第三

第四

第五

第六

第七

第八



写真(7) 居合印可十二用之次第(1)

第九

第十

第十一

第十二

○天神正

林明神

林崎 甚助重信

写真(78)

田宮平兵衛照常

長野無楽斎謹露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛直則

七戸 権右衛門

松山 善之丞

棟方 嘉兵衛

享保元<sup>(二七一六)</sup>  
丙申

八月五日

浅利伊兵衛殿



写真(78) 居合印可十二用之次第(2)伝系の部分と日付。朱印・花押はない。

## 解説

1、「十二用之次事」には形を示す人物画はなく、太刀の動きを図示しているのみである。これは「林崎流居合指南秘伝書」(既出、二九六―二九九頁)の「十二様之刀劔名之事」を指していると思われる。「刀劔名之事」とは「刀劔」の名称ではなく、「刀法」の名称である。すなわち①雪打、②月影、③沢濁、④頭丁、⑤諸子返、⑥小尻投、⑦禁劔、⑧寄拔、⑨柄返、⑩車返、⑪位合、⑫声の拔の十二の刀法である。

## 15、居合印可五ヶ之次第

卷子本

本資料は先が欠損のため標題不詳。表に細字で次のような添え書きがある。人物画によって形を示している。

「元禄十五(二七四二)年閏八月十六日権右衛門方善之丞へ

請取と如此上ニ書付有

正徳五(二七一五)年八月五日棟方氏方伊兵衛へ御相傳書

写

「居合印可

五ヶ之次第」

林崎新夢想流居合

極位秘術唯授一人

目錄

五ヶ次第 写真(79)

懸身

待身

右劔

左劔 写真(80)

聲拔

○天真正

林明神

林崎甚助 重信

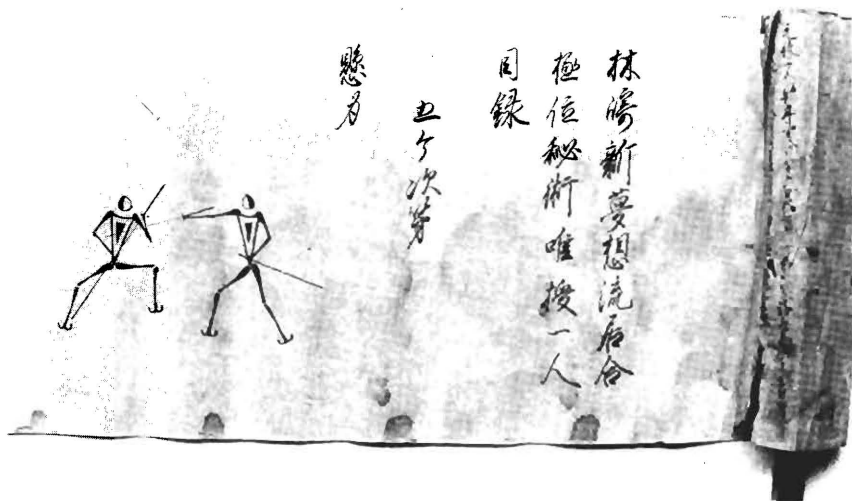
写真(80)

田宮平兵衛照常

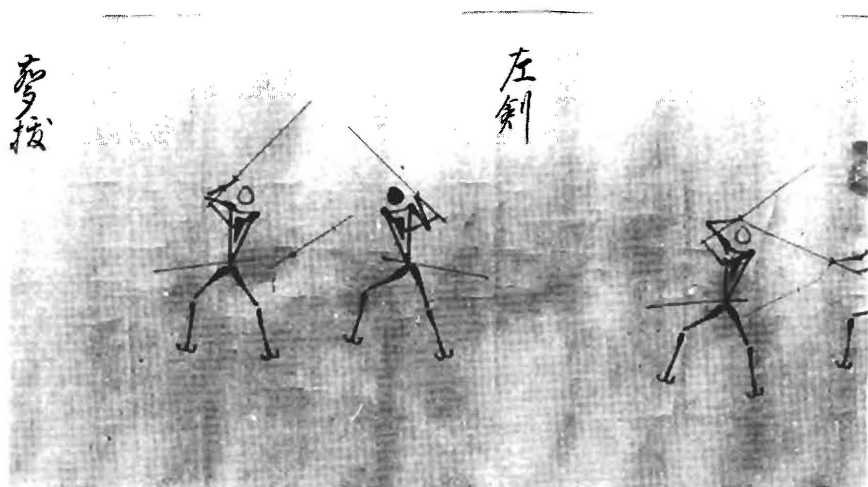
長野無楽斎權露

一宮左太夫照信

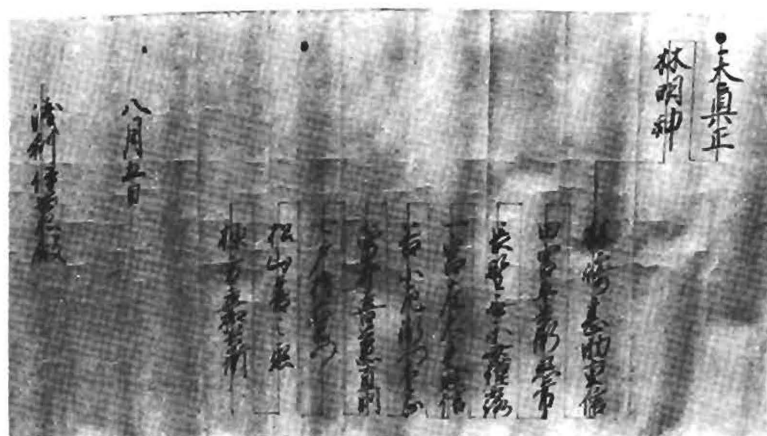
谷小左衛門季正



写真(79) 居合印可五ヶ之次第(1)「懸身」



写真(80) 居合印可五ヶ之次第(2) 「左剣」



写真(81) 居合印可五ヶ之次第(3)伝系の部分。日付に元号を記載していない。



八月五日

浅利伊兵衛殿

常井喜兵衛直則

七戸 権右衛門

松 山 善之丞

棟 方 嘉兵衛

# 16、居合印可切刃之次第

卷子本

本資料は先の部分が欠損している。また虫害が大きい。人物画で形を示しているが、虫害のため  
分明ならず。

林崎新夢想流居合

極位秘術唯授一人

目録

第一

切刃次第 写真(82)



写真(82) 居合印可切刃之次第(1)

第二

第三

第四  
写真(83)

第五

第六

第七

○天真正

林明神

林崎甚助 重信

田宮平兵衛照常

長野無樂斎  
☐ ☐ (極露)

一宮左太夫照信

常井 喜兵衛

七戸 権右衛門

棟方 嘉兵衛

八月五日

浅利伊兵衛殿



写真(83) 居合印可切及之次第(2)

## 17、居合印可合口之次第

卷子本

本資料は先の部分が欠損している。

林崎新夢想流居合

極位秘術唯授一人

目録

合口次第 写真(84)

雲入

洞入

押入

逢無拔

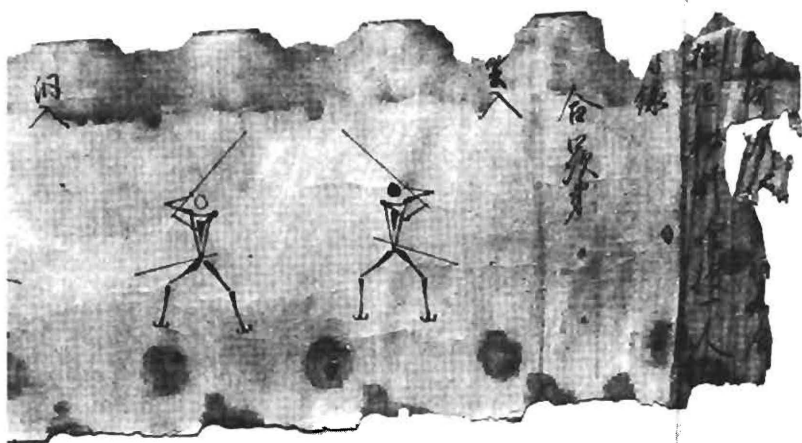
手離入拔 写真(85)

○天真正

林明神

林崎甚助 重信

田宮平兵衛照常



写真(84) 居合印可合口之次第(1)

八月五日

——浅利伊兵衛殿——

長野無樂齋謹露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛直則

七戸 権右衛門

松山 善之丞

棟方 嘉兵衛

# 18、居合印可高上極位之卷

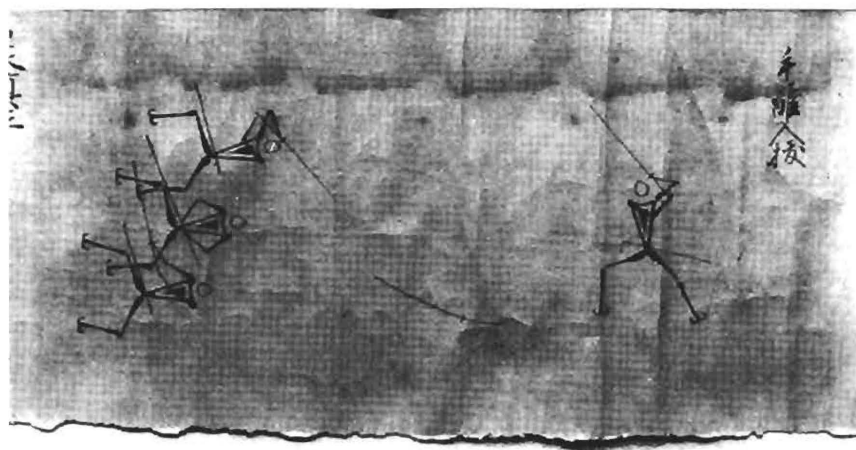
卷子本

本資料も破損が大きく、初めの部分は判読困難である。他の資料から推して、内容を「高上極位之卷」とする。

高上極位之卷

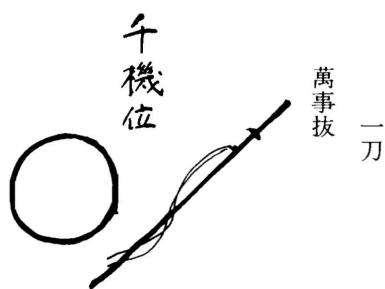
写真(85)

抑此兵術者自己默然而  
無進莫退左右又如斯

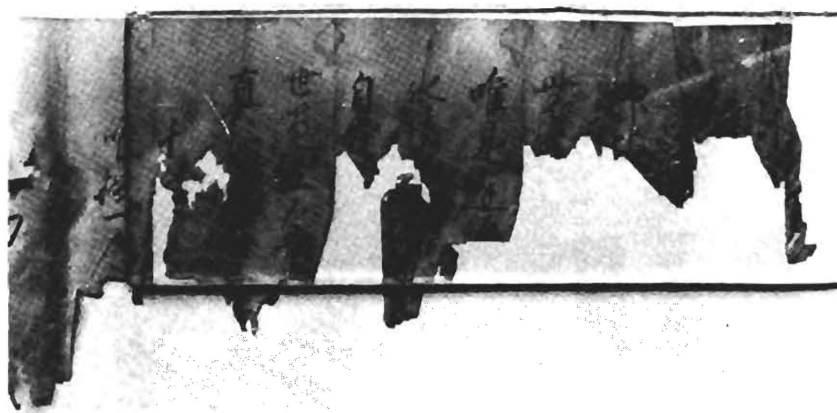


写真(85) 居合印可合口之卷(2)

○天真正  
林明神



唯是逢源到劍刃上走  
冰陵上於生死岸頭得大  
自在向六道四生空古人云  
世間空々無佛性空々  
真按之右之兵術也  
千金莫傳可秘々々  
唯授一人



写真(86) 居合印可高上極位之卷

林崎甚助 重信

写真勅

田宮平兵衛照常

長野無楽斎謹露

一宮左太夫照信

谷小左衛門季正

常井喜兵衛直則

七戸 権右衛門

松山 善之丞

棟方 嘉兵衛尉

正徳五<sup>(二七一五)</sup>  
乙未

八月五日

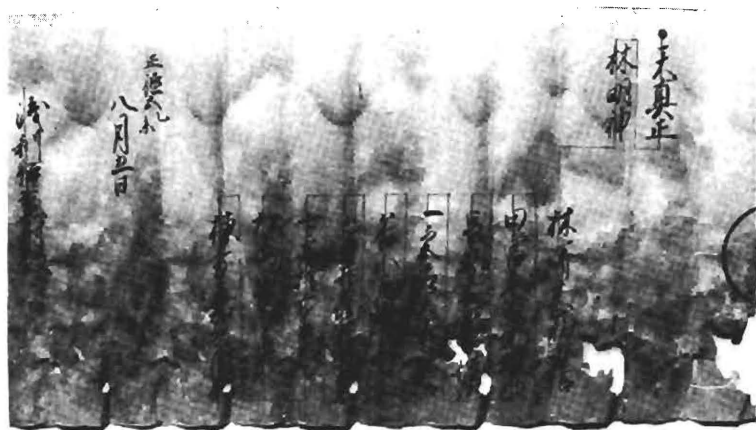
浅利伊兵衛尉殿

## 19、居合許印可心持之事

卷子本

本資料は先の部分が欠損している。内題をもつて  
 標題とした。

居合許印可心持之事  
 写真 勅



写真(87) 居合許印可高上極位之卷(2)伝系の部分。元号が「正徳五<sup>乙未</sup>八月五日」となっている。

向  
表之次第付太刀数之次第

- 一、押立 二、押拔 三、防身 四、除身  
五、幕越 六、胸刀 七、頭上

左身之次第 太刀数之次第

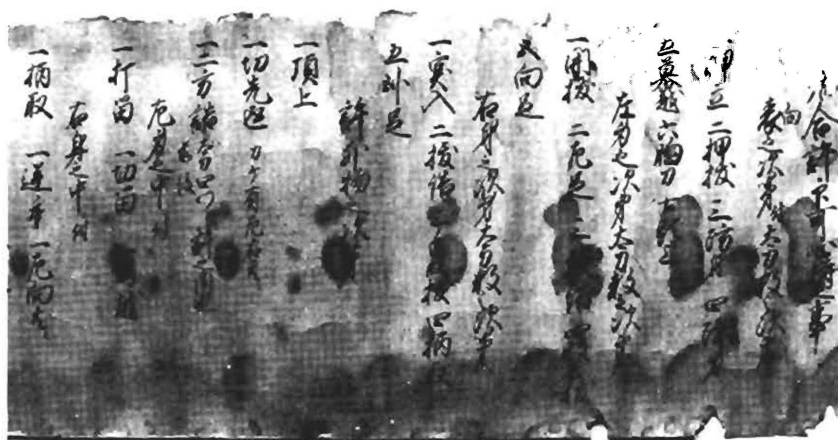
- 一、開拔 二、左足 三、鞭結 四、肢去拔  
五、向足

右身之次第 太刀数之次第

- 一、突入 二、拔詰 三、手取扱 四、柄取  
五、臥足

許外物之次第

- 一、頂上  
一、切先返 カケ有左右共二  
一、二方詰 太刀四ツ 許之内也  
前後



写真(88) 居合許印可心持之事(1)

左身之中ニ付

一、打留 一、切留 一、山越

右身之中ニ付

一、柄取 一、逆手 一、左向共二

印可之太刀数之次第

一、左行合<sub>立合</sub> 一、右行合 一、走通

大脇指太刀数之次第

一、向二ツ 一、右三ツ 一、左ノヒザニ付一ツ

一、立合二ツ 一、右同一ツ 一、左小脇指右心持一ツ

一、柄取色ニ付<sub>而</sub>数多

下緒之大事

目付萬事ニ渡ル

心持三段用之事



一、サク事

サクモ有

一、ノル事

ノスルモ有

一、イキル事

イカスモ有

一、ツヨミノ事

ツヨミイタスモ有

一、ワカレロノ事

ワカレサスルモ有

一、ウツル事

ウツスモ有

一、スム事

スマスモ有

## 拍子用之事

一、カルイ拍子 一人ノ拍子カル事

## 心持之事

一、大氣大ユウ

一、一心ヨリ二心

一、殺活ノ二ツ

一、キレイノハタエ

カマイノ中ヨリカマイヲスクール事

## 悪拍子之事

一、ツヨキ拍子 一、シタウ拍子 一、アト拍子

一、ヲモイ拍子 一、ウク拍子 一、大拍子

### 悪三段之事

一、ナマリケ 一、サヒケ

### 悪心持之事

一、カマイヲスク事 一、ケナゲナハタエ之事  
是皆悪事可秘々々

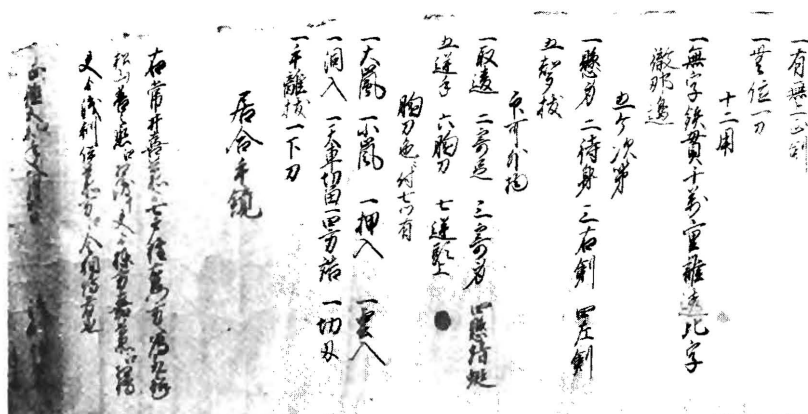
### 許

一、萬事抜ハ太刀取 一、万事ヲトナレハ拍子ニ付ヌク  
一、有無上正劔  
一、無位一刀

### 十二用 写真(89)

一、無字鉄貫千萬重離透此字

徹那邊



写真(89) 居合許印可心持之事(2) 本資料を「居合手鏡」としている。最後に本資料についての経緯と日付「正徳5乙未年8月5日」また「浅利伊兵衛手書」とある。

## 五ヶ次第

- 一、懸身 二、待身 三、右劔 四、左劔
- 五、聲拔

## 印可外物

- 一、取違 二、寄足 三、寄身 四、懸蜻蜒
- 五、逆手 六、胸刀 七、逆頭上

## 胸刀色三付七ツ有

- 一、大嵐 一、小嵐 一、押入 一、雲入
- 一、洞入 一、天車切留 一、四方詰 一、切刃
- 一、手離拔 一、下刀

## 居合手鏡

右常井喜兵衛ゝ七戸権右衛門方へ写取候趣  
 松山善之丞江相渡り夫ゝ棟方嘉兵衛江相傳  
 夫ゝ浅利伊兵衛方江令相傳者也

正徳五<sup>(二七一五)</sup>年八月五日 浅利伊兵衛

手書

# 解説

1、「印可」の段階に至って伝授される技法の巻物と思われるのが、次の六巻である。

14、居合印可十二用之次第 享保元<sup>(二七六)</sup>年八月五日

15、居合印可五ヶ之次第 八月五日

16、居合印可切刃之次第 八月五日

17、居合印可口之次第 八月五日

18、居合印可上極位之巻 正徳五<sup>(二七一五)</sup>年八月五日

19、居合印可心持之事 正徳五年八月五日

ただし19「居合印可心持之事」は「浅利伊兵衛殿」あての巻物ではなく「浅利伊兵衛手書」となっている。

2、15「居合印可五ヶ之次第」、16「居合印可切刃之次第」、17「居合印可合口之次第」の「日付」が「八月五日」とのみ記載され「元号」が入っていない。何れも同じ書体であるので浅利伊兵衛が書き写したものと思われるが、「享保元年」か「正徳五年」か不分明である。「――之次第」という表現形式から推して「享保元年」とも思われるが確信はない。

## あ　と　が　き

當田流棒の伝書は、まえがきにも述べたように、1、2、3の三巻が當田半兵衛吉正が浅利伊兵衛均禄へ授与した、いわば津輕弘前藩の原本ともいふべき伝書である。同流の他の伝書は、すべてこの三巻の写本といってよい。

1、2、3の伝書の日付が「延宝八年（一六八〇）九月十五日」となっていて、これは浅利伊兵衛が當田半兵衛より「當田流太刀嫡傳之卷」と「當田流太刀印可之卷 一」を授与された日と同じである。おそらく、當田流太刀の印可と當田流棒の印可を同時に受けたのであろう。

林崎新夢想流居合の伝書は、正徳五年（一七一五）八月五日、棟方嘉兵衛より浅利伊兵衛に渡った12—19の伝書と、これを書き直して体系を整理した形の4—10の伝書と大別して二通りある。

棟方嘉兵衛からの伝授は「書物ばかりの傳授」で、実際の術技に関しての伝授はなかったと思われる。当時居合の術技は、すでに浅利伊兵衛の方が数段上にあつたと思われるからである。なぜなら、浅利伊兵衛は、前述したように「延宝八年（一六八〇）」當田流太刀の印可を受け、『奥富士物語』などにもあるように藩中随一の武芸者であつたし、居合についても「均禄夢想居合極意之卷」（延宝八年（一六八〇）九月一日）を自分で書き、「弟子中執行（修業鍛練）募り、尤も人柄然るべき人躰へ伝授すべきものなり」と自信の程が伺えるような添え書きをしているからである。この書を書いてから三十五年も経過して棟方嘉兵衛から「書物ばかりの傳授」受けることになるが、三十五年の間に浅利伊兵衛の居合は、心技ともにますます円熟の域に達していたことであろう。それでも浅利伊兵衛は、棟方嘉兵衛より授与された12—19の伝書の伝系には、常井喜兵衛—七戸権右衛門—松山善之丞—棟方嘉兵衛—浅利伊兵衛と書き、伝書の流れを証している。

しかし、4—10の伝書の伝系には、常井喜兵衛—浅利伊兵衛とし、術技に関して常井喜兵衛よりの直伝であること

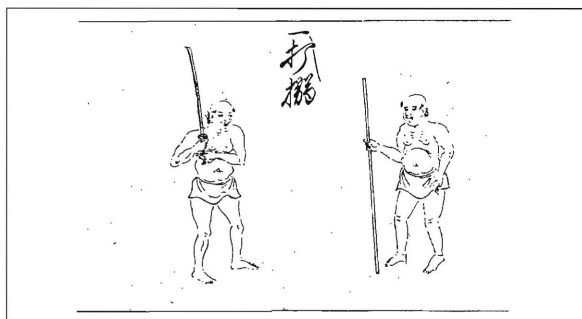
を明確にしている。伝書の内容も心技の上達・習熟の程度に応じて体系的に整えた。これは浅利伊兵衛の優れた指導者であつたことの一面を示している。心技の指導体系づけは、理論と実技に達していなければ容易にできることではないからである。浅利伊兵衛にして始めて出来得ることであつたと思う。以後、浅利伊兵衛が体系づけた4—10の伝書が、津軽弘前藩における林崎新夢想流居合の伝書の原本となつた。『奥富士物語・巻四下』（六頁）に、「（常井喜兵衛の）弟子浅利伊兵衛均禄、事（術技のこと）理共に悉く備わり即ち師範す。従来の学（まなぶもの）者（居合を修行する者）皆以「均禄伝」を不出」とあるが、もつともなことである。

それにしても、林崎新夢想流居合の伝書に仏教語の多いのに驚きかつ困惑した。すべて難解であつたからである。恐れずに意識を試みたが的をはずしている箇所があるに違いない。ご叱正を乞う次第である。

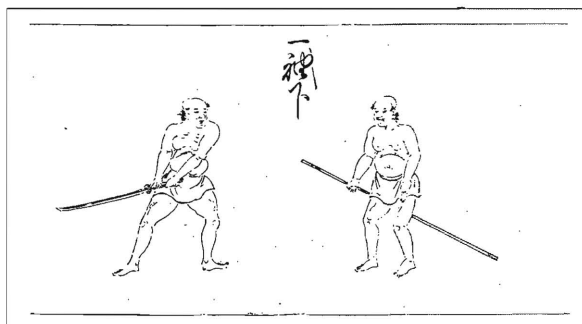
（昭六三・一〇・一二）



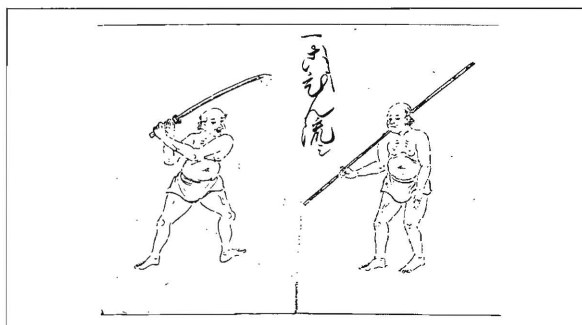
写真(1) 「當田流棒」右より「當田流棒日録一」(表之日録)、「當田流棒日録二」  
(表之日録)、「當田流棒極意卷三」高さ約16.5cm。



写真(2) 當田流棒目録一（表之目録）「打揃」

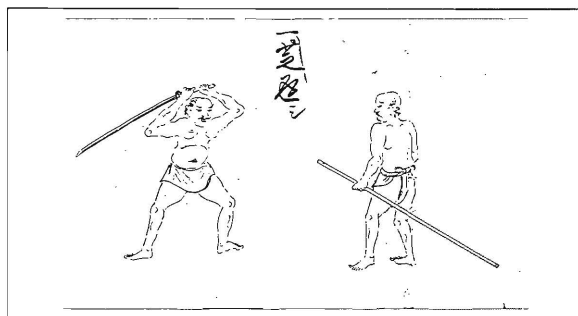


写真(3) 當田流棒目録一（表之目録）「袖下」

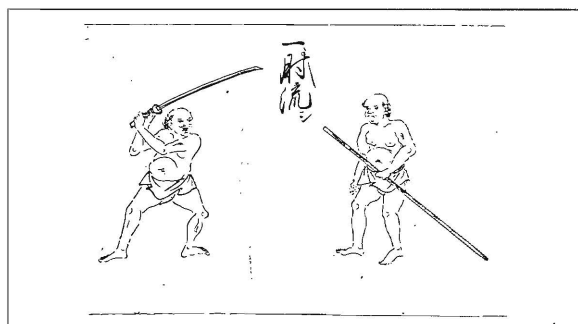


写真(4) 當田流棒目録一（表之目録）「こびん流シ」





写真(5) 當田流棒目録一（表之目録）「芝返し」



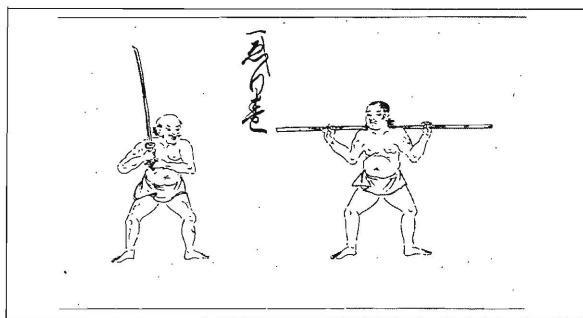
写真(6) 當田流棒目録一（表之目録）「肘流し」



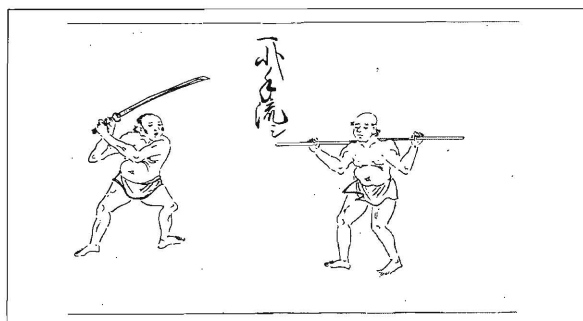
写真(8)a. 當田半兵衛尉吉正の朱印と花押。



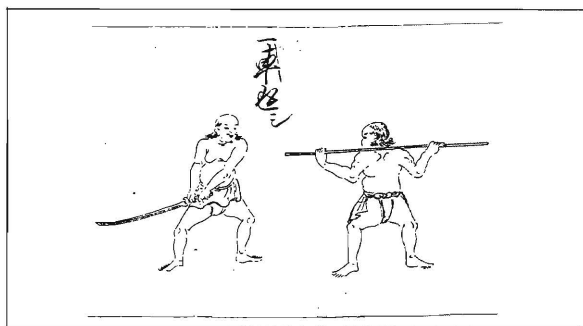
写真(8)b, 當田半兵衛吉正の朱印。印材は柘植。



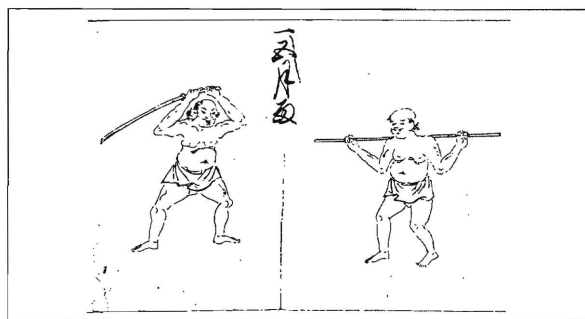
写真(9) 當田流棒目録二 (表之目録)「ゑり巻」



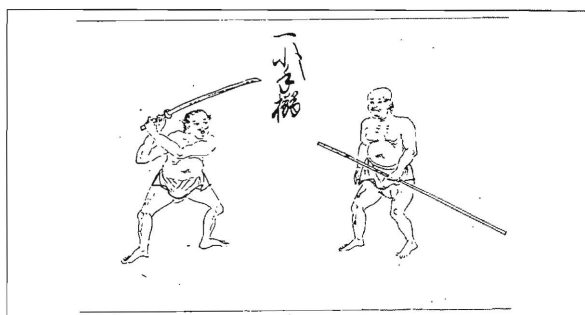
写真(10) 當田流棒目録二 (表之目録)「小手流シ」



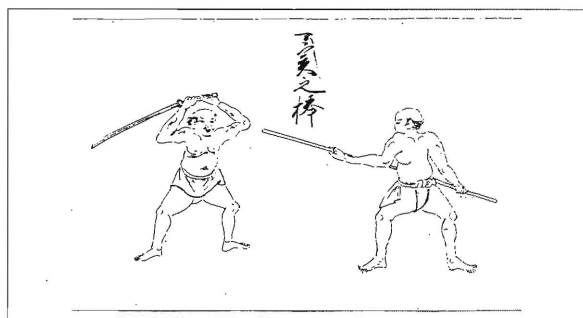
写真(11) 當田流棒目録二 (表之目録)「車返シ」



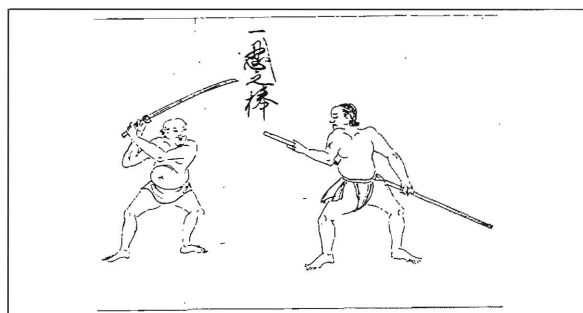
写真(12) 當田流棒目録二（表之目録）「五月雨」



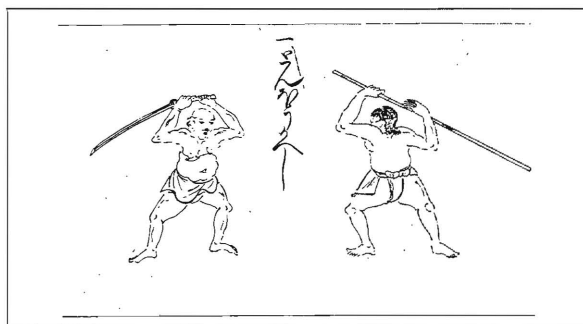
写真(13) 當田流棒目録二（表之目録）「小手搦」



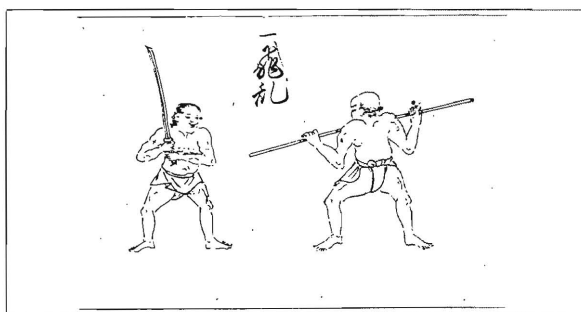
写真(16) 當田流棒極意卷三 (極意之卷)「実之棒」



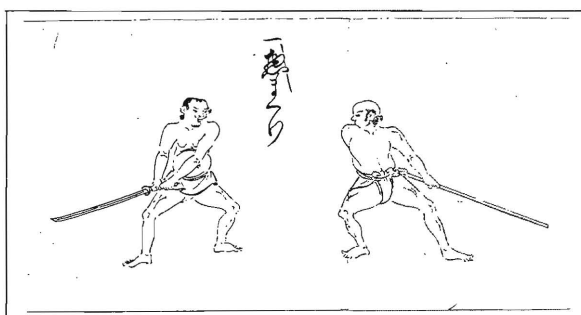
写真(17) 當田流棒極意卷三 (極意之卷)「忍之棒」



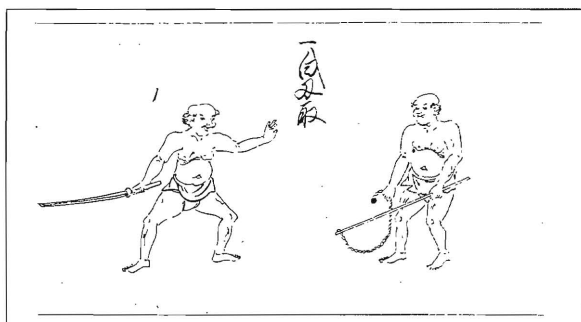
写真(18) 當田流棒極意卷三 (極意之卷)「とんぼうかへし」



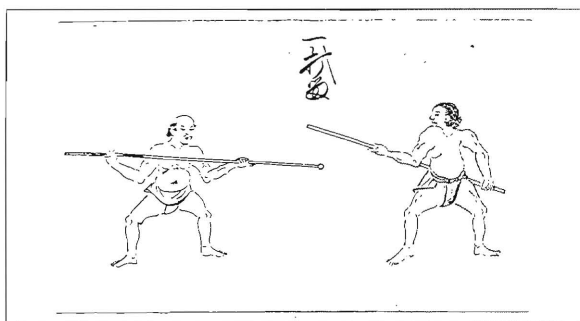
写真(19) 當田流棒極意卷三 (極意之卷)「飛乱」



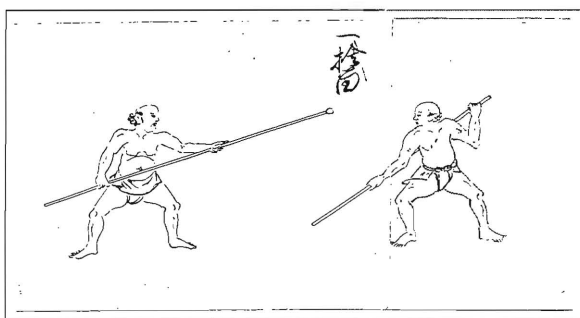
写真(20) 當田流棒極意卷三 (極意之卷)「惣まり」



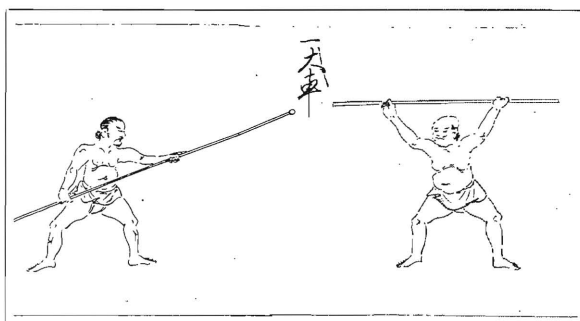
写真(21) 當田流棒極意卷三 (極意之卷) 半棒之大事「白刃取」



写真(22) 當田流棒極意卷三（極意之卷）鑓留之大事「打留」



写真(23) 當田流棒極意卷三（極意之卷）鑓留之大事「捨留」

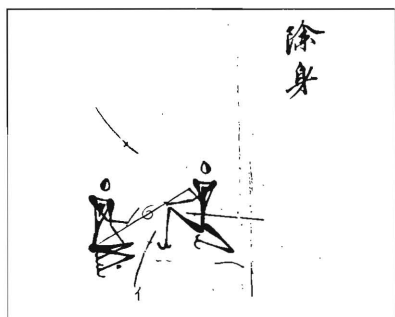


写真(24) 當田流棒極意卷三（極意之卷）鑓留之大事「大車」

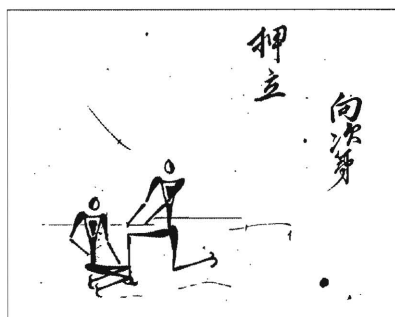




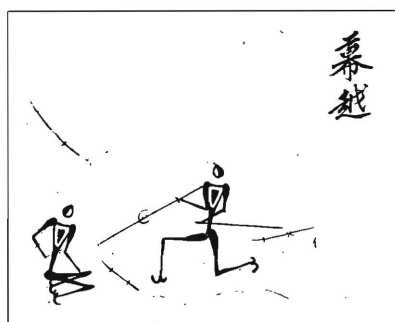
写真(30) 林崎新夢想流居合の卷子本。右より「居合向次第一」「居合右身之次第二」「居合左身之次第三」「居合外物次第四」「居合外物次第五」「居合秘歌之卷六」「極意相傳之卷」「均禄夢想居合極意之卷」



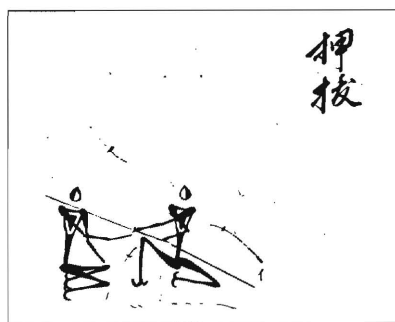
写真(37) 向次第一「除身」



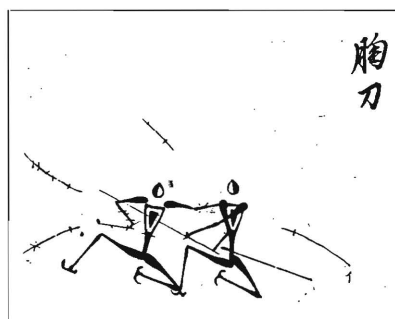
写真(34) 向次第一「押立」



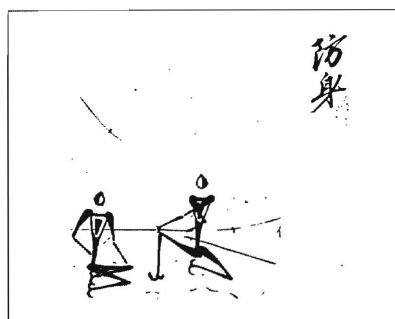
写真(38) 向次第一「幕越」



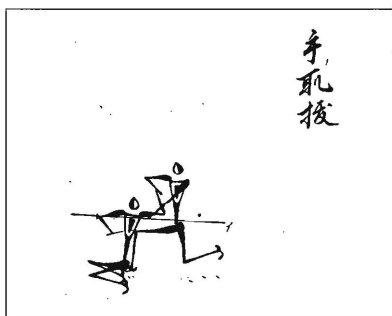
写真(35) 向次第一「押拔」



写真(39) 向次第一「胸刀」

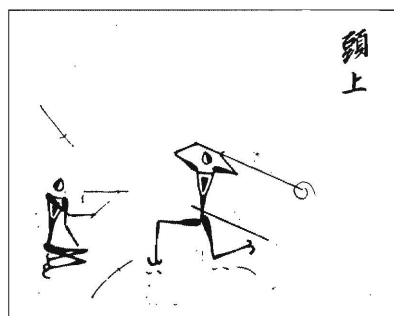


写真(36) 向次第一「防身」



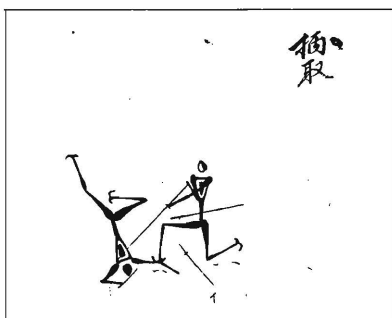
手取拔

写真(44) 右身之次第第二「手取拔」



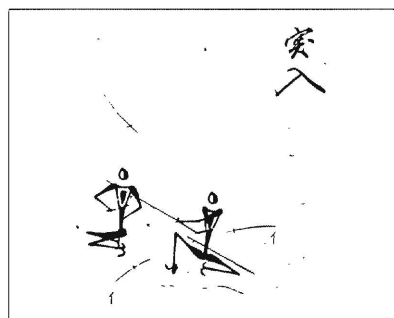
頭上

写真(40) 向次第一「頭上」



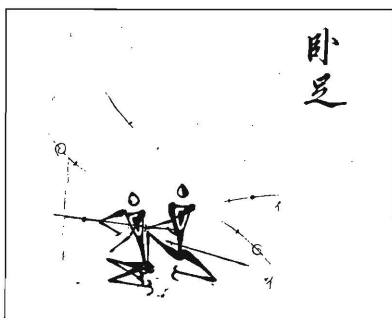
柄取

写真(45) 右身之次第第二「柄取」



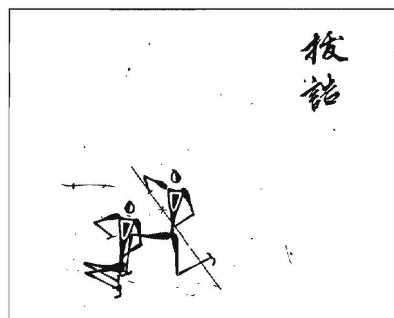
突入

写真(42) 右身之次第第二「突入」



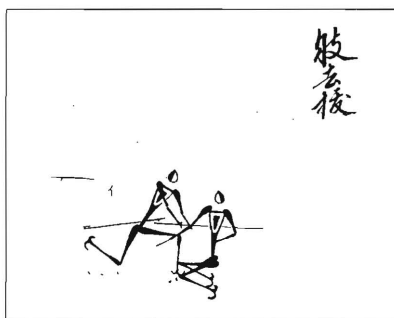
臥足

写真(46) 右身之次第第二「臥足」

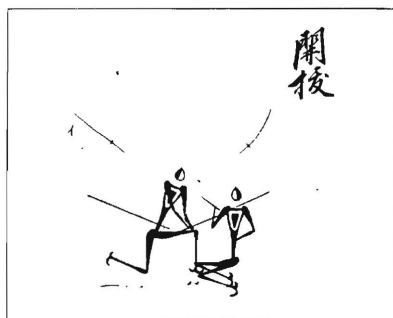


拔詰

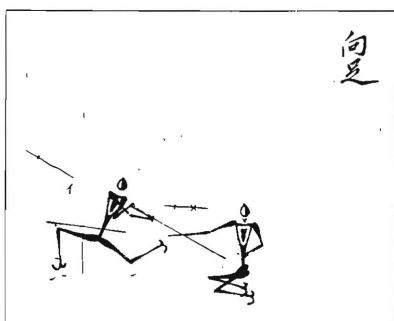
写真(43) 右身之次第第二「拔詰」



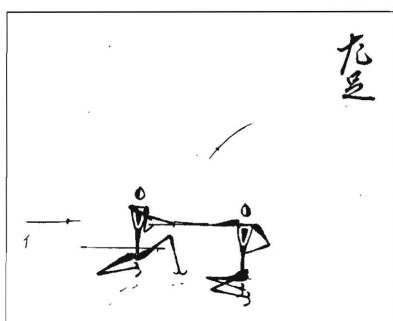
写真(50) 左身之次第三「肢去拔」



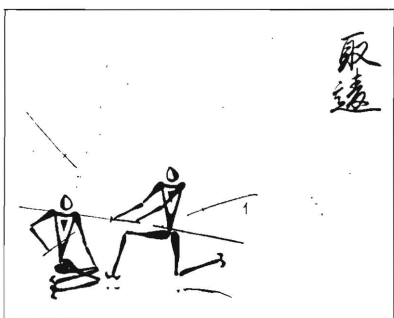
写真(47) 左身之次第三「開拔」



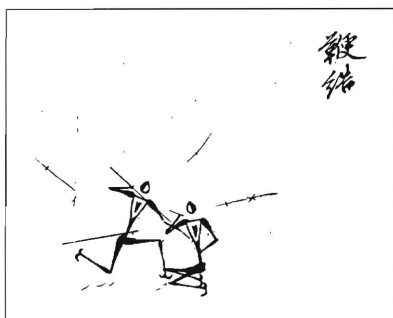
写真(51) 左身之次第三「向足」



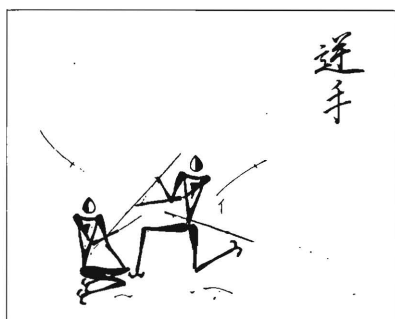
写真(48) 左身之次第三「左足」



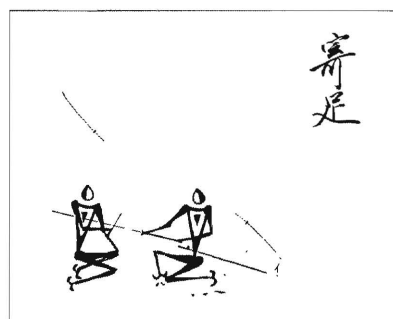
写真(52) 外物次第四「取遠」



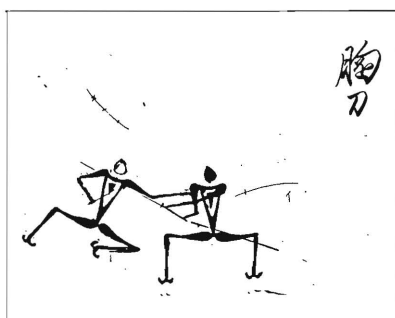
写真(49) 左身之次第三「鞭結」



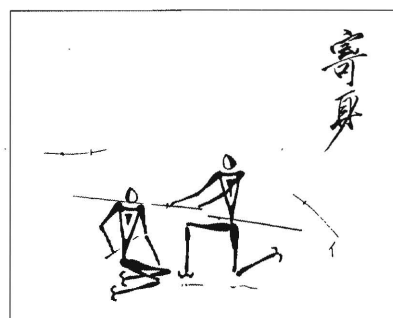
写真(56) 外物次第四「逆手」



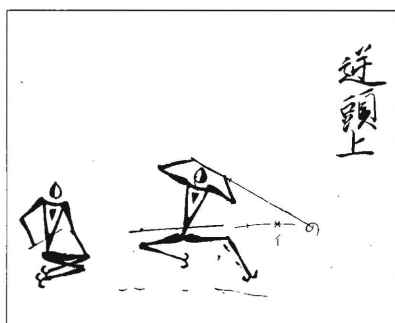
写真(53) 外物次第四「寄足」



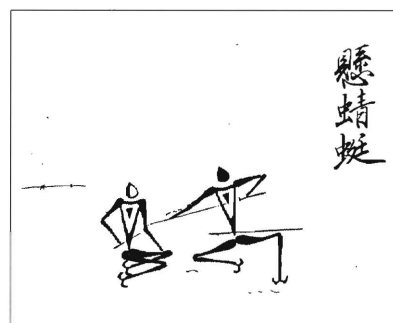
写真(57) 外物次第四「胸刀」



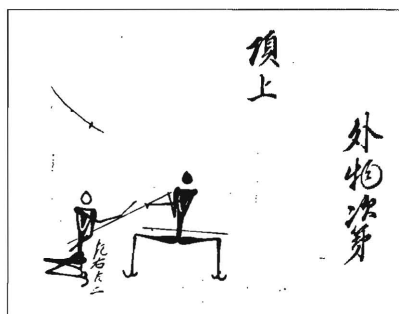
写真(54) 外物次第四「寄身」



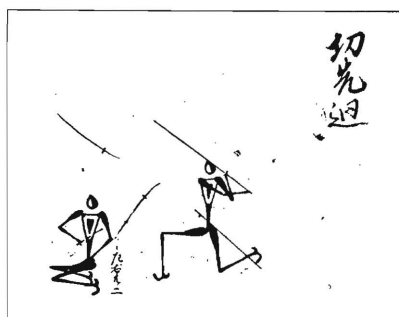
写真(58) 外物次第四「逆頭上」



写真(55) 外物次第四「懸蜻蜓」



写真(69) 外物次第五「頂上」



写真(60) 外物次第五「切先廻」



写真(61) 外物次第五「二方詰」